
今時金色のヴィーナスの方程式・空の軌道編

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今時金色のヴィーナスの方程式・空の軌道編

【Nコード】

N7682X

【作者名】

模造堂

【あらすじ】

お断り事項、定番のVRMMORPGではないです、またデスゲームでもありません。転生憑依でもありません。チートものでもありません

とは言っても昔書いたものですから古い感じですが仮想現実体験型ヴァーチャルゲーム的一幕が挙がります。

注意グロテスクな描写があります、流血を嫌う方は読まないことをオススメします。

伝説を求めて歴史は動き出します、そう静かに確実に正確に

序章（前書き）

定番でなくてすみません

序章

第一部、第一編、紡がれる日常の前置き。

夜明けが近い今は暁だ。煙草の灰が落ち吸い殻を草むらに押しつける。ガキが煙草を吸うなという大人がいるが騒音の一つだ。煙草といえはこの街じゃあ煙のでない車が一般的だ、技術の進歩でいう電気自動車が普及しているが公共移動機関でモノレールが存在する、世界でも珍しいことに三層に及ぶ大規模なモノレールだ。

時季は春にして三月の終わり、四月からは成人の二歩手前高校二年生の前期が始まる、珍しくもなくなつたギルドの活動、学生市場独立保護機構という正式名称を使う者も少ないほど当たり前になつた。元々は学生の市場開拓から相互扶助組織に発展し、まあ幅広く広まつた。そんな学生との兼業で探偵なんかをしている、学費の元を取る気で始めた商売は後少して一年になる。捜し物係の様な存在だがたまに珍しい依頼もある、今回はその珍しい依頼だ。人に害のある犯罪に対して過剰な攻撃をする非合法組織アルカイザーズの調査は多くあるが、その中でも珍しいのはその組織から直接依頼されることだ。

内情は知らないが浮気現場の動画撮影を依頼された。そこまでわかるなら辞めさせるなり罰則を適応すればいいが依頼されたことに文句を言う必要はない。手っ取り早く浮気をしているが浮気というのは知らない、三十後半の男女が公園のベンチで懐かしそうに世間話をしている。浮気とはいわないだろう。

依頼されたのは法的に浮気といえる現場を押さえることで世間話をする現場を納めることではない。一時間ばかり話しそして男女は別れ、朝方帰宅する。男性の方の奥さんから依頼されたがあまりのま

まに話した。

仕事で遅くなり一休みする場所に偶々居合わせた女性と世間話をするようになった。仕事の量からして過労死しない方が珍しい体力の持ち主だ。朝方八時から午前の四時までの仕事、残業代の話より疲労で倒れるのが当たり前だ。それを愚痴にすら出さない、出来た男だ。

だが依頼者の妻の方は信じられなく追加依頼をした。楽な仕事をくれるありがたい話であるが馬鹿馬鹿しいあそこまで働く夫に対してそこまで不信心を持つ方がおかしいだろう。依頼者を保護し緊急病棟の精神科、神経科に連れて行った。疲れがたまっていたのは奥さんの方で育児疲労と判明した。

夫の男性に話した、働きすぎて奥さんは育児に疲れていると残業を止め、育児を手伝うことを強く勧めた、男性の方は悪気が当たり前になかったそうすると話少し残念そうであった、聞けば出世したてて仕事が楽しかったらしい。アフターケアもここまでだ。

個人営業なので事務所はない、法律的な関係から税務に至るまで生徒会がするが今月の春休みからは休みだ、かといって必要な手続きも税理もない。探偵の仕事も終わり寮に帰る。

小さな寮で四階建ての庭すらない外装はコンクリート下地に物好きがスプレーアート施し、何となく安っぽい。中は一階がロビーと受付のカウンターと事務机のある場所、リビングに食堂に何故かあるカウンターバーの様な一角、二階から三階までの部屋、二階が男子、三階が女子、四階が訓練施設だ。寮に入ると寮長の今度三年生になる鳳 美鶴が居る、朝方の訓練に起きたらしく朝方に帰寮する俺を一別する。

「仕事熱心だな」

「皮肉と嫌みと苦情と小言は勘弁してくれ」

「ならギルドの規則である十一時までの労働時間を守れ」

「アフターケアで手間取った、勤労な旦那さんに育児で疲れた奥さんよくある話だ」

「依頼内容を話すな」

「ごもつとも」

完璧美人ともつばら噂の鳳先輩との会話を終わらせ二階へと上がるために螺旋階段を上る。体力はある方だが個人業務が報われることは少ない。

二階のラウンジで缶珈琲を購入し、一息つく、煙草がほしくなるがその前に腹が減った、最悪なことに昨日の朝から清涼飲料水だけの栄養源だ。飲み干すとリサイクルの指定ゴミ箱に入れる。自室に戻り着替え眠りに入る。

起きるとシャワーを浴び簡単な調理器具でラーメンを作り食べ終わると片づける。

携帯が鳴る、確認すると依頼が入っている、実験に協力してほしいと。珍しい依頼なので私服着替えその場所に向かう。街は七姉妹都市と呼ばれている、七つの海上都市が融合したから名付けられた。中央のサハスララ、北アジュニヤー、北東ヴィシユタ、南東アナハタ、南マニブラ、南西スウェイスターナ、北西ムラダーナ。内ムラダーナはヴィーナス企業体専用都市だ。

中央のサハスララは都市機能を密集させた関係者以外立ち入り禁止、実質五つだけが通行可能で依頼されたのはムラダーナのヴィーナス企業体専用都市技術開発部門の実験。何のことかはわからず至

着し事情を説明すると入れてくれた上に案内された、一つの都市だけに独自の通行手段であるモノレールが行き渡り技術開発部門の専用区に到着する。案内する人が代わり技術開発部門専用区で一人の科学者が待っていた。

「小此木 要一だ」

「工藤」

「用件は一つ私が開発した遺伝子強化を受けてくれないか」

「確か生物遺伝子医療計画、機械因子医療計画がありましたな」

「その二つと共にもう二つの計画があり一つは変異遺伝子計画、一つが強化された人々を無力化する計画、無力化計画とある、その無力化計画の実験で君に白羽の矢がたった」

小此木の話聞き流し実験を受けることを承諾した。どのみち危険はないと判断からだ。

研究室の培養液のカプセルに入り注射での遺伝子強化を受ける。

付与される能力は無力化計画の一環である、電磁迷彩、可視光線を歪め透明化する能力を見破るために電熱視認能力。高電圧の電磁場バリアを無力化するため同等の能力、強化された遺伝子を睡眠させるための無力化ガス能力、それは一つの能力にして三つの具体化能力、妖魔の剣、妖魔の小手、妖魔の具足この三つは相手の持つ能力をコピーする能力だそうだ総じて妖魔の武具と呼ばれている能力。相手の恒常的強化能力を弱体化させるための超音波能力を最初のコピーした以上四つだが追加の依頼でチューナー能力と恒常的強化能力が付与された。

小此木博士が考えたのは巷を騒がすアルカイザーズに対抗する能力。ただそれだけだ。実験が終わり能力の熟練のための訓練や基礎的学習から応用学習等をこなし早速実戦に挑む。

アルカイザーズの作戦を小野木博士が流しアルカイザーズの一組がマニブラの犯罪組織の殲滅を行う、その作戦を先んじて行えばアルカイザーズのアルカイザーは敵として現れるだろうという読みだ。場所はマニブラの第一貿易区の倉庫、変身後の外見は生体甲殻装甲甲冑を身に纏う、

零下二百度にも耐えられ、摂氏数百度の高温にも耐えられ、真空中に近い状態にも耐えられる生物としてはアフリカに住むユスリカの幼虫の能力をコピーしたモノだ。

倉庫に突入する、犯罪者の一党は下手な攻撃は効かないと判断し機械装甲服、人間が直接着込み稼働させる機械の鎧を着込み通称アーマードという専用の機関砲を撃ち始めた、それを電磁場バリアが無力化する、電磁場バリアはアーマードの重火器を無力化する防御力を誇るらしい、人数を把握する、合計二十名が応戦し障害物であるコンテナに砲弾を撃ち込んでいる。

手近な一人の的を絞り電磁場バリアをぶつける、一撃で大破し中にいる者は即死か重傷だろう。

電磁場バリアをぶつける方法で四人を撃破する、さすがに分が悪いと判断したのか接近させず障害物を盾に攻撃に転じる。逃げ回られると弱い、遠距離攻撃手段を持たないことや、相手は燃料を使うことでの自動車並みの速度が出る接近しなければ攻撃のしようがない。お手上げとばかりに退却しようとする和本物のアルカイザーズの男女が突入した。外見は瓜二つのアルカイザーやアリアンフロッド、圧倒的な熱線で瞬く間に潰す。そしてアルカイザーが前に出る。

「おい紛い物」

怒っているような声をかけられた攻撃のレベルが違う、勝て

るような相手ではないので逃亡する、それを追ってくることはなかったが博士と合流し報告すると抜本の見直しが必要だと判断された。ひとまず今日の所は終わり。俺はというと能力テストでの能力の把握、レベル的にはBマイナスと判断されたアルカイザーは基本的にA、通常の人とはつまりスペック的には中途半端な生き物。

「どうも失敗のようだ」

小此木博士が白髪のを掻きむしりながら話す。

「身体速度があがらないことには、どうしようもないアーマードにすら勝てないのだから」

俺の言葉に小此木博士が項垂れるが、考えが浮かんだらしい。

「電熱探知能力は欠かせない、電磁場バリアも外せない、能力をコピーする妖魔の武具に対アルカイザー能力を集めよう、残った一つについては身体反応速度向上能力」

「追加料金とるからなまた培養液か」

「助かるよ」

研究室の培養液に入る、小此木博士が投薬するための操作を繰り返し、俺は軽く睡眠をとる。

起こされ塗れた体を拭き、私服を着込む。小此木博士がディスプレイで説明する。

能力の整理で電磁迷彩の可視光線を歪め透明化する能力を見破るために電熱視認能力、高電圧の電磁場バリアを無力化するため同等の電磁場バリア、身体反応速度上昇能力アクセラレーターを付与し

超高速での活動を可能とさせる、能力一つ妖魔の武具は能力にして三つの具体化能力、元々は相手の持つ能力をコピーする能力を活用し、妖魔の剣にリミテッド反応発熱能力、妖魔の小手に強化された遺伝子を睡眠させるための無力化ガス能力、妖魔の具足に相手の恒常的強化能力を弱体化させるための超音波能力。

「了解したチューナー解放後妖魔の武具を解放してみる」

チューナー因子を活性化させた後変身する、周囲が非常に遅く感じるどうやにアクセラレイターの能力は成功らしい、電磁場バリアの確認も終える、電熱探知の確認が終わり、妖魔の武具を解放する小手が具体化し生体甲殻装甲甲冑の中に生まれ小手の所が隆起する、具足の部分である足の甲冑内部に生まれ隆起する。最後に剣が具体化し手に生まれる。何事も順調に進んだ。ハズだった、博士の様子がおかしく何かを指さす、鏡と判断してみると何の異常もないハズだったが艶やかなプラチナブロンドの腰元まで伸ばし、と俺の髪は黒髪だ異常に感じヘルムを解除する、実際の年齢は知らないが十代中盤の最後の十六歳、愛くるしい碧眼の切れ目、優美な眉は形が好く、鼻梁は高く、小口は桜色の花卉のよう口唇、西洋的美少女の顔立ちになっている。

「冗談ではないスリーサイズは見応えがありモデルのような痩身ではなく砂時計体型の豊かな胸に見事に張った腰回りから伸びるスラリとした足、明らかに性別まで変異している。そして能力の負荷に耐えられず通常の状態に強制変異する。男性に戻っていることを確認し安堵する。」

「小此木博士？」

「またしても失敗らしい」

「というより悪化しているようだったが、性別変換など聞いてい

ないぞ」

「君は落ち着いているな」

「一時的な状態だ異常かもしれないが、通常の状態に影響しないなら、関係はない」

「当座はデータから研究してみる今日の所は帰ってくれ」

携帯での支払い後研究室から出ようとして能力の酷使のため力が抜け意識を失った。夢を見た子供と少女が遊ぶ夢、直ぐに消え目が覚めるのは研究室の仮眠室で異常なまで腹が減った状態だった。博士が食べ物置いておりそれをひたすら食べる、味わうというより飢えを満たすという方が適切だ。鏡を確認したが変異は存在しない。博士が原因究明に勤しんでいる。

「小此木博士帰るぞ」

「ああ、どうも付与された能力は、高い消耗を強いるらしい変身するなら一日一回にしておくことを強く勧めるよ」

すでに二回していることに苦笑しながら出て行く、モノレールでムラダーナのヴィーナス専用都市から離れヴィシユタの学寮に帰寮する。夕方の夕焼けを玄関に面した道路からみる、一仕事を終えた後の夕日は綺麗だ。見終えると中に入る。

寮の一階のリビングに鳳が居た、暇そうに雑誌を読んでいる。近くには同じく三年になる荒戸 昭彦が夕食の出前、いつもながらの牛丼を食べている。同学年の二年になる女子の栗栖野 縁が挨拶を送る時な俺を凝視する。受付に帰寮したことを記録し出前で夕飯を注文するその後リビングのソファに身を沈めた。

「どうしたの工藤、肌が綺麗になっているじゃない」

「おそらくエステに行ったのだろう」

俺が茶化すと明保野が睨み付け俺の手を取る。自分で見る限り別段と変わりはない。が栗栖野は何度も観察し先輩である鳳先輩に話す。

「鳳先輩肌が」

「ヴィーナスの培養液にでも入ったのだろう、あれは皮膚を活性化させ美容効果がある」

栗栖野が感心し俺を質問攻めにするが守秘義務を盾に適当に返す、出前のピザが到着し支払いを済ませ食堂のカウンターに座り熱い内に食べる。食べ終わると箱を捨てる。

自室に戻り家計簿をつける、収入はあるが出費も多い。学費の元も取れ後は儲けを出すだけだ。

ドアが叩かれる

「栗栖野ですけどお客さんよ」

「あいよ」

シャワーを浴び取り付けられている鏡を見る、平凡な少年の顔がある、断じて欧米風の美少女ではない。見間違いではないが現実的にあんな顔になるのはぞっとしない。軽い口内や眉の手入れを行い、口臭を変えるガムを噛みながら私服に着替える、シャツにスラックス、ボウタイに厚手のジャケット、ここは南西諸島、寒かろうが何だろうが暖房は必要経費で使えない。

客は一階で待っていた、女性で清楚な印象の科学者らしい、前置きはなく用件を話した。

「この世で尤も凝ったゲーム開発をしています、そこで依頼とい

う形ですが体験してもらえませんか」

「イヤだ」

「今ならヴィーナス製品割引券百万円分を用意しています」

「普通に円払えよ」

「もちろん前金で五十万、後金で五十万いち早くクリアするなら二百万用意しています、合わせて四百万円分を用意しています」

金はほしいがどうも怪しい、いかがわしさ大爆発。たかがゲームに金を用意するか。しかし金はほしいと引き受けることを前提に話す。

「引き受けたいのですが、予備知識や前置きを必要とします。無条件で引き受けるほど暇ではないもので」

「説明書なら体験版の中で使えます」

「具体的にはどのようなジャンルで？」

「自由度の高い体感ゲームです」

「具体的にはどのような部分が自由なのですか、シナリオですか、イベントですか、敵ですか、味方ですか、装備ですか」

「全部です、凝っていますからゲーム好きもゲーム否定派も、これは良作だというしかないゲームです」

話す気はさらさら無い訳か、なら質問を変える。

「では何故自分に？」

「平凡な高校生だからです、成績も可もなく不可もなく、交流関係はあるもの親友と呼べる存在はおらず、仕事熱心ではあるモノ優秀とはいえない」

「断つてもいいわけですよね？」

「もちろんです」

「どうもお互い知りもなく助け合う間柄ではないようです、お断

ります」

席を立ち後から何を言おうとも無視して二階へと上がっていく。ろくでもないゲームで時間をつぶすほど余裕はない。部屋に入りネット上で依頼を引き受けようと仕事部の公式サイトを閲覧する。あの女性のことを警察に通報する違法のゲーム開発主任と。今頃道端で任意同行から賞金稼ぎの相手でもしているだろう、ああいう輩は多い他人の足元を見ることになっている、ヴィーナスの社員は勘違いしている所で予想外のこと起きると他人のセイにする、俗に言うギリギリの悪だ。

腹いせが済むと多少調べてみる、ゲーム開発とは確かにあるヴィーナス企業体は情報産業が本業、娯楽やサービスにも力を入れている。だが妙に思えるヴィーナスが成功したのは現実世界の情報や海上自由都市建造、言い方を変えれば現実を前提とした会社と言える。あんな社員であんな風に依頼をするとは思えないというのが結論だ。

気になるヴィーナスの技術開発部の科学者小此木博士に電話を繋ぐ。小此木博士も同じ結論で語りではないかと推測された。確かにヴィーナスの社員とは名乗っていない。つまり警察に通報したのは正解で今頃逮捕されていると事だ。

電話を切ると携帯に依頼が来た、一日で三回の依頼は珍しい最高記録に並んだ。

「ヴィーナス娯楽部門空の軌道課です、誠に申し訳ありません、語りの犯罪者に企画を使われるとは、誠にすみません」

「余計わかりましたよ、どう考えてもあれは偽物ですね質が違う、ただ謝罪は受け入れるわけにはいきません私の不徳の至りです。自分が謝罪します、ご迷惑をおかけしました」

「いやはやお互い気をつけるモノですな、依頼というのは当部門が力を注いだ一大企画であり、正直他社の真似できるモノではありません、ゲームでありゲームではないと言いますか最先端のヴァーチャルゲームです、それが空の軌道、ご興味がわきましたか」

「そちらに向かった方がよろしいでしょうか？」

「これは失礼、引き受けてほしい用件はゲームの体験であり、一種の実験でもあります、その査定をしてほしいのです、聞けばゲーム嫌いの学生探偵がいると当部門に対する挑戦ですな」

「そこまでいわれると査定お引き受けしましょう、ただいつ頃になりますか？」

「いつ頃といいますが、査定ですのでランダムですから好きなときにダイブするのです、ダイブは当部門の者が名付けたゲームログインです今年の四月から販売するのですが学生社員からまいち冴えないと酷評で、悪い点をあら探してほしいのです、そして改善できない事を発見することと、逆に変えるべきではないところを探すことです」

「わかりました、今からいきます不定期の仕事ですね」

「はいムラダーナの娛樂部門に、お名前と用件を言えば案内してくれます」

正式の依頼として引き受ける、部屋から出ると警察官に捕まった詐欺師の女性が放送されている液晶画面を栗栖野が見せている粗悪な詐欺師だと放送されている。

「お見事賞金でるらしいわよ」

「いらん、警察にでも寄付するさ仕事がある暇か？」

栗栖野が仰々しく驚く、今回は人手がいると判断した。

「助手というわけではない、協力者として割り勘で働いてほしい、

ゲームの査定だそうだ」

「ゲーム絡みか暇というか珍しく力入れているじゃない、よし手伝うわ」

「感謝、今度驕るよ」

「でゲーム会社？」

「ヴィーナスの娯楽部門だ」

これに栗栖野が驚く、地元最大企業からの申し出だ。金になる上に保険も適応される。

「マジ？と言うか何で学生の探偵雇うの？」

「非常に簡単だゲーム嫌いだからだ、噂になっていたそうだゲーム嫌いの学生探偵がいると」

栗栖野が納得し「少し待っていてね」と廊下を歩き階段を上っていく、俺は逆に降り、一階に到着する、三年生になる暇人二人が暇そうにしている。ソファアに身を沈め。

「暇そうですね先輩方」

「そう言うおまえは？」

「ヴィーナスから依頼を受け娯楽部門に仕事に行きます遅くなると思います」

「意外に繁盛しているな、ヴィーナスから来るのは最低でも二年はかかると聞くが？」

荒木先輩が尋ねる、俺が訂正する五年だ。一流になると判断された勤労で確かな者だけに絞り外注するのがヴィーナスだ、超企業の名声を持ち事実ヴィーナスの支社がない国家などなく、ましてや新コロニー計画で作られた海上居住空間の海上都市の建造や管理で関わっていない事柄などなく収入の多くを地元や貧しい土地柄に流し

時として国際問題すら引き起こすそんな筋を通すそして大真面目に世界平和に尽くしている企業。学校の友人に学生社員がいるが自慢にするほどの企業だ。そしていい企業でもある。

「今時学校をさぼってまで仕事を引き受ける学生を当てにした訳か、よかつたな仕事が認められて」

「珍しいですね鳳先輩が人を褒めるのは」

「おまえが問題を起こすからだ」

「ごもつともただヴィーナスといえは気になることもあります、非合法的な人体実験を行っている、既に十年以上噂されている、何度か調査したことがあるので詳しいですけど」

「風評など大企業なら当たり前だ、何よりヴィーナスは相当恨みを買っているからな、スタイリッシュなイメージ戦略は隠れ蓑と呼ばれる程だ」

「そう言われているが具体的なことになると話したがないですよ？」

「本当に詳しいなその通りなのだ」

栗栖野が一階に現れる、ナチュラルメイクに大人の感じのリクルーティストが、装飾品が全くない地味なハズが、華がある。

「二人でいくのか？」

「ええ春休みも暇ですから仕事でもしています」

「と言うことは、暇人は俺と美鶴か、まあ暇しておく」

ソファから体を引き起こしロビーでの記入後、外に向かう。ヴィシユタの駅からモノレールからムラダーナに向かう。専用の駅のために下車する者は取引先か社員だ。ヴィーナス企業警備部門警備兵が俺を止める。携帯での正式な依頼を表示すると一応確認するが胡散臭がっていた。

「なぜに？」

俺の自問に栗栖野が笑いながら鏡を指さす、ありふれた高校の学生が見物にきたような外見だ。

確認がとれ、警備兵が案内につき広大な専用都市のモノレールから娯楽部門専用区に到着する。

「聞きたいが怪しいか？」

「残念ですが勘違いの観客かと」

警備兵の一言にへこむ新入りの栗栖野の方が怪しくないなら俺は新米か？警備兵が苦笑して。

「いえ観客とは探偵のことです、色々探られる側ですから、中には国外まで追い回す探偵までいて、警備部門では探偵と判明した者はひとまず追い返せと」

表情に出やすい性格だが握手を求めたら代わりに珍しい情報をくれた。

「変な話ですが探偵の方が大変興味を持つ事件がありました、十六年前の第一次遺伝子戦役その際活躍した者が居るのですが、戦死したことになっていますが、実はロシア国籍で生存しているのです、自分も買いたい情報です」

「ありがとうございます、探ってみたいですけど今回は初依頼をこなします」

警備兵が敬礼し去る、警備兵の多くが元を辿れば戦闘を生業とする部族や一族、それをヴィーナスが纏め上げ世界中の紛争地域の情

報護衛に立たせた、名誉と金と祖国をと謳った時代の寵児だ。娯楽部門専用区に入り用件と依頼を引き受けた過程から必要な情報を提供する。

娯楽部門は当たり前に広く空の軌道の企画課から関係する場所は多く、部門あげての一大事業とを感じるほどだ。迷子の気分で電話しようとするときとちよつとした絡繰りがあつた。現在の技術で五官の味覚は再現できない情報だ、しかし残る四つは可能とするただそれは前準備がいる、それを必要としない機械の広告があつた。担当者が俺と栗栖野をみると外来者と判断し体験を勧める。

現実に体感すると多少の問題があるが凄まじい技術だ。

「今なら」

「済まないが、電気の消費量が尋常ではないようだが」

「今後の克服点です」

「それを改善しないことには市販はできないだろ」

「しかし、それを上回る魅力が」

「学生には高価な品だ」

担当者が痛い点を衝かれ、項垂れる。アンケートに答え、場所を尋ねると案内された基本的に広大なため案内人なしでは迷うことが多いらしい、特に海上都市に暮らしたことがない者は同じような十字路の連続に困惑するらしい。担当者は改善点を話したがそれ以上に電力を克服しないことには市販は無理だと内輪でも話されていたらしい。何気なくロシア国籍の話をするに興味があるらしいが、多重国籍が珍しくないためヴィーナスの前身である李企業体の情報保管質で調べるしかない。案内された場所はある意味慣れているがカプセルが置かれ培養液の中でのゲーム体感、空の軌道を体感しながら多少の違和感を持ちながら行つたらしい。

「ゲーム？」

「慣れた、このパターンなれたよ、ヴィーナスは培養液とカプセル好きなんだ」

依頼した担当者を探すと思いつきりコスプレのファンタジーの格好をしておりゲーム好きらしく熱く空の軌道を語っていた。外来者の二人と聞いて怪訝な顔になる。

「誠に申し訳ありません、客観的女子学生の視点が重要に思え同僚を紹介します」

「確かに、女性には理屈っぽいだの夢がないなど酷評を受けています、まあ培養液は好評です」

「早速ですが査定に入りたいと思います」

「その前には是非粗筋を語らせてください」

「好きですな」

「大好きですよ、ゲーム好きにはたまりませんな」

「いや開発主任がそこまで熱くなれるなら、余計にご静聴させてもらいましょう」

「待つてオタクじゃないけど前置きなしにしたい折角だから楽しみたい」

「何を言います、オタクになってももらいますよ、あ自己紹介ですが大江戸 横木です」

「栗栖野 縁です」

「工藤です、下の名前はややこしいので工藤で結構です、しかしそこまでいいですか」

「空の軌道を越えるファンタジーは存在しません」

「なるほど開発者であり、一個人として押しますか、しかし、市販料金は？」

沈黙が流れる、気になり額を尋ねると億の単位だと話した。ただ厳密には違う、ソフトが必要でハードもいる、それだけにすると急激に減り何百万の単位に落ちる、ただ付属品や様々な音響機器その他諸々の付属品を購入した方が、どう考えてもお得だと言わせる力作であるが、逆ギレを受けた事もあるそうだ。

「既に購入予定の需要はあるのですが、採算に追いつきません」
「たかがゲームに億はないかと」

大人なら笑ってすませるが大江戸主任はマジギレた、が、慣れた上司や部下が落ち着かせ胃薬と頭痛薬をセットで飲む。その手慣れた動作から相当な言われ様があったのだろう。

「絶対に購入意欲を持ちますよ、絶対に」

「そこまで言われる」

「粗筋を聞きましょう」

「よくぞ聞いてくれた、体験するしかない、しかし、もしですぞストーリーの中で話されている相手が倒れたらどうします？助けますよね、でもそれは必要な寿命がきたいのだといわれたらどうします？昔は医療技術がなかったから助けられなかった、しかし、今は助けられる、だけどその人はヴァーチャルか？それとも本当に有った出来事か？」

「熱いですな、まるで過去の世界のようです」

「ご興味がありましたら体感のほどを」

俺と栗栖野が笑う、当然のように興味を持ったつい聞き入ってしまった。ゲームは嫌いだが疑似体験することが悪いわけではない、ただ時間の無駄に思える、しかし好きな人はやはり好きで世界中に存在する、情報分野をいけば必然的にゲームの情報が入るほど普及しており多様だ。説明されタイプする。

序章（後書き）

第一章からゲーム内です

第一章紡がれる日常（前書き）

古いラノベを思い出しますが、ゲーム開始です

第一章紡がれる日常

第一章、紡がれる日常

「赤き姉は無慈悲な女王、威厳を持ち我らを見下ろす、青き妹は無慈悲な戦士、ただ冷ややかに我らを見下ろす、空行く船は死に神の翼、我らの御霊を地獄に運ぶ、見上げる我らは虐げられ者、怒りを持ち、空を睨む。赤き姉と青き妹、二人並びてこの夜の空に、戦の炎を見つけては、嘆き、悲しみ、怒り、笑う。我らはずいに拳を握る、我らはずいに矢をつがえる、無慈悲な姉妹に立ち、向かいゆく、ただそれだけが生きる道と。我らの怒りはこの空と全ての大地を焼き尽くし、我らの悲しみはこの空と全ての海を凍てつかせ、ついに無慈悲な姉はこの地を追われ旅に出る、そして無慈悲な妹は姉を待ちながら静かに眠る。恨みの言葉を残しつつ、凍てつく星の世界へと、永きを旅した女王は二つの節目ごとに舞い戻り、再びこの地に舞い降りて、不幸の種をまくだろう、狂気の剣を振りかざし、この世の全てを奪うために」

老人が語る違和感のない語りだ、語り終えた老人は一つの剣を俺に渡した。

「夢見し自由を得るがいいただ忘れるな節目は近い」

「そうか女王が舞い戻るか」

剣を握ると老人は静かに息を引き取った、語り部の老人の冥福を祈る場所は村らしい、中世の木製の家屋が建ち並ぶ空は青く冬空のようだ。身につけているのは中世の衣類、珍しいもない外見だ、財布らしき袋を持っているが何も入っていない。栗栖野を探したら語

り部の老婆をみていた、亡骸になる。

「よう」

「悲しいわよね、さっきまで話していた人が亡くなるのは、私はクリス、貴方は」

「クトゥー湿っぱいが節目が近いらしいどこか落ち合う場所を決めよう」

クリスが周囲を見渡す、開けた広場に大きな家がある、そこを指さし手近な民家に向かう、俺は武具やお決まりの魔法といった商いの店を探した。武具屋が一軒ある、そこにはいると主人が一別し。

「冒険者か？」

ごく自然な語りだ、冒険者とはいわれ違うともそうであるとも言えるが何故か黙っていた。

主人は悲しそうな瞳で一つの書を渡した。

「入門の魔法がかかっている、駆け出しには丁度いい金がないなら他を当たれ」

「なぜ親切にする」

「なぜ？誰だって初めはある、そうさな俺も夢見たからかな」

懐かしそうな瞳は悲しくも悲壮感のある顔だ。受け取ると主人は選別の金を渡した。それは受け取れないために断った。広場で落ち合う、大きな家に寄りかかり書を見る。魔法の説明があつた、五属性魔法、炎、氷、雷、風、地、癒しの魔法、即死の魔法、聖なる魔法の八つが魔法といえるだが入門には後一つの魔法もある敵を食ら

い自らを変化させる魔法や自らの体を使い、敵を倒す術、合計十の魔法、後者の二つは禁断の魔法とある。

魔法の書は同時に与える魔法でもある選択した魔法の一時的に付与し行使させる、完全の覚えると使いこなせる。俺は敵を食らう魔法と自らの体を酷使する魔法を選択した、同時に二つが限界らしく目の前に紋章がでる、二つが与えられ同時に完全に体が覚えるのに必要なカルマポイントがでる。雨が降り始める、にわか雨だ、それに乗じるように霧が立ちこめる、うつすらと覆う霧だ。そしてクリスが悲しそうな顔で現れる。

「悲壮感あふれているわね、世紀末にある戦に怯えながら暮らしているらしいわ、ゲームとしては悲しいストーリーね」

魔法の書を渡す、読み終わると癒しの魔法と聖なる魔法の二つを選択する。

「全て夢幻だけど確かに出来映えはいいわ気づいている、囲まれているわよ」

霧の中から一人の騎士が現れる、馬に乗り馬上から攻撃するための槍を持っている。

「禁じられし魔法を行使する者よ、戦の語り部にならん」

「クトゥーまさか喰奴の魔法や修羅の魔法を選択したの」

「味覚はないんだろ」

「あんたゲームでもして善い事と悪い事があるでしょう！」

「忘れたか俺達は査定人だ、悪いところや最低の所をみるためにきた」

クリスは何も言えず、武器である剣を抜いた、馬上にいる騎士が

槍を持ち駆け出す、刀剣の訓練はしたことがないが禁断の魔法を使用する俺に与えられた変異を行う、チューナーの外見に酷似した生体甲殻装甲甲冑を身に纏い、クリスの顔からわかるがやはり女性の体つきになったらしい気にはいられない。剣を構え備える。

「汝咎人となり」と騎士が話し槍で突き刺すが穂先から後ろの柄の部分を持ち落とす、騎士が槍を捨て長剣を抜く、その隙に一時的に付与された修羅の魔法を使い毒の効果のある攻撃を行う、剣を馬の足に行い馬が倒れ騎士が降り立つ、その時に剣を突き刺し血が飛び散りながら食らう魔法を行使する、ヘルムの口の部分が外れ騎士の首にかぶりつき、そのまま食いちぎる、騎士が絶叫と呪詛の言葉を残し最後の一撃を行うそれを剣で弾きもう一度食いつく。

今度は成功し騎士が即死する。カルマポイントが加算され俺の戦闘経験値が増える。

クリスは醜惡な戦いに吐いていた、俺の常識からしても壮絶で醜惡な戦いだ。

「これが最低の戦いだ」

「最悪、でももう遅いし、もしかしてゲームオーバー？」

「さあな」

大きな家の門が開く、その中に俺が逃げ込む、クリスも後に続き門が閉まるのを確認して一息つく、俺の口周りから体中に飛び散った返り血がかかりクリスが嫌惡するように距離をとる。

中には中年の男性と少年らしい子供がいた。

「なぜ咎人に？」

中年の男性が悲しそうに尋ねる。少年は怯えるように父親の後ろ

に回る。

「さあな、勇者じゃないからかな」

「行きの先も戦の渦中だ魔法を解くか？」

「悪いが俺が選んだ道を悔いることはない、果ての先まで通すのみ」

門がまた開く、どうも一度のやり直しの機会だったらしい、中年の男性が魔法を詠唱する敵となった男性を殺す気はなかった、子供の前で殺人はさすがに咎められる、クリスが飛び出し俺も続く、広場に何人かの兵士がおり簡素な鎧に剣を構えている。霧の奥から矢が放たれ俺の甲冑に突き刺さる。装甲は貫通していない。

「包囲から突破するクリス」

「最悪、あんたおかしいでしょう？」

俺が包囲から抜けようと走り出す、クリスも同じく走り出す、ゲームであるがリアルにも追っ手が来るそして馬上から槍を構える騎士が数人いる、それを無視し駆け抜ける、村から出ると追っ手はい代わりにモンスターとの鉢合わせがあった。

剣で切り倒す表示にゴブリナとかかれたレベルの相手だ、一撃で切断され飛び散る血飛沫、先はなかった突き進む。本来なら勇者にしる正義の味方にしる人々に支援される側であるが俺が選択した魔法により追われる者になる。クリスが水辺を見つけ。

「最低限血は洗いなさいよ」

水で洗う血が水辺に流れていくパラメーターの表示に俺の名乗った名前と数字とあだ名が付く騎士殺しのクトゥーそして賞金が懸け

られている。罪人扱いだ。クリスのパラメーターの表示には駆け出し冒険者である俺が持つていない道具に世界地図がある。大陸はオーストラリアの地形に酷似しているシルメノア大陸、またの名を呪われし大陸。

現在の場所は始まりの島と表示されるマーモ島、船で大陸にわたる必要がある。そこに行くまでは最低限島の国王から大陸渡航許可書があるとクリスが話した。最初の頃はクエストを行う等の色々とすることがあるらしいが、罪人はかなりリスクを負う。治安のいい場所なら騎士と兵士に追いやられ、悪い場所なら賞金目当ての盗賊に付け狙われる。

「まともなゲーム体験は却下ね、と言うより無理、意外にはまっていたのに」

「おいおい仕事だぞ」

「私が村とか町とかで活動するから、クトゥーは村とか町とかに入らないで」

「話が変わるがストーリーから政権交代だろうな」

「ああ、伝説の語り確かにね、冷静に考えれば確かに政権交代ね」
「次の場所に行こうか」

地図で確認したが手近なところに王都がある、現代でいう首都だ。その場所に向かう。街道を歩くただだが未だ王都付近で活動しているプレイヤーは俺に嫌悪感丸出しで敵対した。

「正気じゃねえぜ、あんた頭おかしいよ」

「だとしたら何だ」

「ゲームのプレイヤーとしてあんたを倒す、どのみち人を襲うんだろ」

「正義面か、醜いな吐き気がする」

「あたしは関係ないら」

俺の立場はプレイヤーキラーではないが確率としては高い方になる必然的に人を襲う。だがだからといって襲っていいわけではないそれは相手もわかっている、わかっている故に試しているのだと思う。俺が剣を抜く。

「騎士殺しクトゥー」

「頭大丈夫か決闘じゃないんだぞ」

「参る」

水平に構え突き刺す一撃を繰り出す相手は覚悟を決め、剣を抜く早く俺の一撃を弾く相手は体を反転させ裏拳を入れる、だがヘルムに防がれ、俺の前蹴りが金的な部分を貫く。相当痛いらしく離れる。

「女は容赦がねえな」

魔法を構成し詠唱し始める。プレイヤー同士だとわかるらしい射程範囲から抜けると相手は中断する、攻撃魔法の構成詠唱中は硬直するらしい。プレイヤー同士の戦いは相当な技量差がいるらしい、理由は逃げる機会が多いからだ。相手も暇ではないらしくどこに向かつて歩いていく。追う理由もないため王都に向かう。そんなことが四、五あった。

王都に到着する周囲には露天商や様々な商いの人々がいる。見るだけで楽しいがお尋ね者の俺とは目を合わせない王都の外までは兵士も騎士も見回っておらず味覚がないので匂いを楽しむ飲み物を飲みながらクリスが王都にはいる後ろ姿をみていた。クリスが入る門でイベントが発生した。近くの川からモンスターらしき化け物が現れる、多くの人々が門に殺到しクリスも飲み込まれ王都に入る。逃げ遅れた人々が居てそれを助けるイベントらしい。

親玉らしい化け物がゲル状のカタツムリのような生物、子分の化け物は多少レベル差があるモンスターが二体、速攻で一体のモンスター¹の胴体を両断し内蔵や血飛沫が飛び散る。残った子分の一体が武器らしい棍棒で殴りつけるが腕ごと切り落とし反転し首を切り落とす。

親玉のカタツムリに斬りつけるが再生していく。再生が追いつかないまで斬撃を繰り返す、相手は攻撃手段として低速の体当たり当たることもないだが、次第に押され気味になるスタミナという体力とは別の攻撃回数を決めるパラメーター²がつかけているように攻撃回数が減り始めている。決定打にかけると判断し、毒の打撃を受ける体力を消耗する魔法を使うためにコマンドを入力する、単純に攻撃するだけ。これを受けると相手の再生が止まった。

クリスが増援として現れるが、外見が変わっている衣類だけの格好から革製の胴体を守る防具に部分事に革製の防具を身につけている、大鎌を手³に持ち現れた。接近すると話しかけた。

「スタミナと体力を回復させてくれ」

了解に代わりにスタミナを回復させる魔法を詠唱する、構成は必要な対象者の回復だからだ。

魔法の詠唱が終わり、スタミナが大幅に回復する、そして俺が体力を使う複数回の打撃を受ける魔法を使う、一撃から三度の攻撃を受けるやっとな体力のゲージが赤くなる。トドメの一撃が決まる。ゲル状から霧散する、倒し終わるとイベントが終了する。

「あのさ、このイベント、門を使って倒すらしいの」

「先に言えよ、まあ倒したから関係ないが」

「違うのよ私が門に入ってからイベントじゃなく定期的なイベント」

疲れから剣を戻し倒れる、レベルアップの表示になり体力の最大値、魔力の最大値、力は攻撃力に影響し、体力は最大値に影響し物理的な防御力の影響する、魔力は最大値に影響し魔法の全てに影響する、早さは命中率や回避率に影響する、運は様々なランダム要素バランスよくポイントを割り振り、レベルアップボーナスで現在の二つの魔法を完全にマスターする。

「魔法というか食らいつき、地獄突き、バイオクロウ、マッスルボンバーの物理攻撃スキルをマスター」

「色々あるけどもらった剣は王都とかにある神殿で変化させてくるわ」

説明を受けた、首都の機能として受け取った剣の形状を変化させられる、そして今までの行動から適切な防具が与えられ倒したモンスターに分金が渡される、クリアしたイベントの話などが聞け行動からカルマ値、これは行動の結果大陸での行動に影響するマイナスになればお尋ね者としての格が上がり闇のイベントが起こる、プラスなら光のイベントが起こる、そして二つに属さなければ大陸で起こるイベントの中で無属性のイベントを受ける。合計すれば三つになるが今の所最大のイベントである戦争時期にまでは達していないらしい。

大陸での情報は少なく大規模な勢力などもあるらしい、今回のイベントで一時的にカルマ値が凍結される最初の首都に入れることになる。王都に入るとあだ名が変わっていた魔獣殺し、クリスに案内され王城と神殿が融合した場所に入る、プレイヤーが興味深そうに

みていた、本来なら闇ルートのプレイヤーが人を救ったことでカルマ値がゼロになり魔獣と呼ばれる序盤は倒せないとすら言われる強敵を倒した。そうらしい。

神殿の部分にいる巫女から労いの言葉と多額の報奨金を与えられた、そして武器の事になると妙なイベントが発生した。剣が形状を変え俺の体に溶け込んだ。そして。

「どうも適応があつたようですね、数多の勇者がいますが与えられし試練に打ち勝った、勇者と認められた証です」

あだ名が魔獣殺しから勇者羅刹となっていた。

「代わりの剣を用意しましょう」

用意された剣は無骨な柄だけの剣、触れてみるとけ込んだ剣の剣身が入り細身の剣が生まれる。鰐が無いため巫女が用意しレイピアと表示される。

「無形の剣と呼ばれる勇者の資質を持つ者だけが扱える品です、それ以外の者では握るだけで呪われ石化する危険な品でもあります、戦いの中で様々な形になりますそして必ず対となる敵が現れるでしょう、貴方に呪われし兜をとる準備をしますがどうします」

「呪いを解くようになります」

「外せるようになりますただ一時的ですが」

「ならばお願いします」

巫女が兜を取る、一時的に外れ、久しぶりにヘルムが外れた開放感を得る。巫女はノンプレイヤーのプログラムと思ったが違つらし

い、プレイヤーではないがゲームの進行を見守る管理人らしい、見栄えのする顔をみて感想を話した。非常に年寄り臭い話であったが話を聞いてくれたお礼としてフードマントをくれた。暇な時に作っていたらしくお手製で多少の防御効果もあるそうだ、ついでにとスカーフをくれた。フードマントを身につけ口元をスカーフで覆うがヘルムを抱え、剣を鞘に納める。見栄えのする格好だ。

第一章紡がれる日常（後書き）

短くしてみました、誤字、脱字の指摘等と観想などをお待ちしております

第二章紡がれる日常2

魔法の習得の限界があり書と呼ばれる物では多くて二段階、一段階をマスターしたら二段階目から必要になるそれぞれの系統の神殿を訪れないといけないらしい。

パーティというものは存在せず組むならどこまでも可能ただ組んでも攻撃を受けたり攻撃魔法の対象範囲なら攻撃を受ける。防具を受け取れない代わりにアクセサリをもらった。魔法に対して防御力を持つ装備だ。イベントというのはマーモ島で魔法の系統の二段階目を二つ取り、許可書を受け取るために隠された財宝を見つけることだ。序盤は説明的な話が多く大陸でなれた行動をとるための訓練だといわれてお尋ね者らしく日常会話すらノンプレイヤーはしない。クリスが尋ね、情報を集めると俺が聞く、序盤の隠された財宝は難しいらしく見つけられない冒険者、つまりプレイヤーは多い。

宿に泊まり、軽く中断する。現実には視界が戻る。報告に多少笑える要素やまだストーリーが始まらない序盤の慣れないプレイヤーを補佐する誰が居た方がいいと判断し報告した。

自由度が高すぎて迷ってしまう者が多いだろうと判断したら事実最初から迷うプレイヤーが多かったらしく進行を無視して見物に洒落込んでいる者すら居る。

戻る時間になり器具を接続する。

個室の部屋に気配があった、よく見ると泥棒らしい、取られるような物は隠してあるためその前に殴り倒す、これもイベントなのかと思っただけプレイヤーだった。兵士の詰め所に着き出すと報奨金とカルマポイントのプラスがあった。はれてお尋ね者から一般に戻りクリスと合流し二段階目の神殿を目指す。とはいうもののクリスのマ

スターしているモノはなく、マーモ島にでるモンスター相手に苦戦していた、戦闘そのものが苦手らしく、俺が弱らせたモンスターをクリスが倒すといった事務的なことが多かった。

一応喰奴の神殿に到着した、割と一般的な神殿がある、周囲はモンスターの彫像で囲まれ奥に進むと管理人が暇そうに仕事をしているた。

「あどうも、やっときたよ」

「低人気ですからね」

「全くだよ苦労したんだけどね、修羅の方はまだくるらしいよ、ここなんか初めて」

「悪いイメージを持たれていますからね、で試練でもあるのですか？」

「試練というのは一応ある一番困る事に魔獣を食らうことだあれはポーン、ルーク、ナイト、ビショップ、クイーンの五段階ある災害的なプレイヤーキラー、イベントにもよるけど水辺から這い出る最強のモンスターだ。弱点闇だ、光のプレイヤーを襲う、そして闇のプレイヤーを恐れる、無属性のプレイヤーはとある条件で使える特殊能力で楽に倒せるようになる、しかし」

「査定人が最初は厳しい現実ですね」

神殿の管理人は苦笑する、詳しく聞くと闇のプレイヤーが覚える夜の魔法に弱いらしい、管理人が呼び出したポーンクラスの魔獣、正式名称はキャリアー・アンデット・ビースト、大陸で猛威をふるう病気の死者が復活し魔獣となり人を襲う、その辺はゲームによくある死者伝説のようなモノで問題はプレイヤーも感染する恐れがある当然のように食べればその危険は高まる。

一時的に喰努系統第二段階魔獣の能力が付与される単独でクリア

しなくても大丈夫で、二人で挟撃する、俺が前方を取り正面から無形の剣で切り裂く、攻撃力が高まっており打撃をよく受けている後ろから大鎌で斬りつけているが戦闘そのものが不器用で使い方もなっていない。

結局死にかけたところで食らいつきのコマンドで食らった。第二段階の習得が終わり管理人から外せる部分があると話頭部の方は終わっているので上半身の胴体を選んだ。甲冑は重量感を感じさせない物と思っていたが違うらしく、外すと重量があり密着することで感じさせないだけだった。素肌に風を受け心地よい、季節は設定では冬に近い季節らしい。と言うより南極に近い。暖かい季節が少ない場所なのだ。一時間で一日が過ぎ、胴体を装着して修羅の系統二段階目を受けに向かった。マーモ島はニュージーランドに酷似している地形に村や神殿の配置。

隠された財宝はプレイヤーが増えることに隠されそれを探すためのイベントを探さないことには発見しても意味がないらしい。色々と序盤のネタバレを聞き、管理人は相当暇だったようでマーモ島攻略ガイドブックを作っていた試作品を受け取り、やっと地図を持ってフアンタジーの地図をみながら点滅するポイントから方角を決め修羅の神殿に向かう。

山岳地帯にあるらしく険しい山肌を歩き、時折プレイヤーとすれ違うが闇ルートのプレイヤーは好戦的で挑発を行うが本来なら闇ルート一直線の元お尋ね者と戦えるほど強いプレイヤーはおらず、勘違いした光ルートのプレイヤー、正義の味方と交戦している場面に遭遇するが無視して頂上を目指す。モンスターは狩り尽くされ時折モンスターの死骸から採取可能な食料や材料を取っているプレイヤーがいた。

そんなプレイヤーに尋ねると闇ルートのプレイヤーは町や村に入れば攻撃される、そのためにサバイバル技術や知識を教える闇ルートギルドが存在し、マーモ島の拠点を作ることが目的らしい。お尋ね者では無いが、俺はどう見ても同類のために親切だったが、組んでいるクリスには無視する者が多かった。空腹感を持つとクリスが購入した味はないが匂いがいい食べ物を食べる、とは言ってもかさばらないようにビスケットだ。

到着する真夜中、月明かりが唯一の光、生身の疲労感がないため休憩もとらず突き進む。

歩くこと二時間、到着した神殿にイベントらしい竜の飛来があった、倒せば竜殺しの名誉に報奨金からの報酬、材料にもなるがレベルが高く軽く二十五はある、勝てるような相手ではない。

がここは知恵を使う、網を投擲し身動きが取れなくなると毒性植物からとれた毒で弱らせる。

後は数を頼みにタコ殴り、ダメージも相当増えるがタフな竜は火焰のプレスを吐き抵抗する、

それを防ぐために縄で口元を多い殆ど生け捕り状態で倒す。闇ルートプレイヤーは団結力に組織的な行動になれており何よりも拠点がないために神殿を拠点化していた。凄まじい努力だ。

トドメを指した栄冠の竜殺しが多額の報酬を受け取り観戦していた俺達の所にくる。

「甲冑を身につけているが組んでいるのは光か？」

声はハスキーな女性の声、外見は甲冑の上に厚着の長衣を着込み魔導士の様な外見だ。

「いや無属性の中立ルート志願だ」

「そうかよければパーティに入れてくれないかどうかとも接近戦が苦手
で魔法ばかり使っている、その上に卒業の竜殺しだ前衛が居ないと
弱い、見ればポーンを倒した証まである、大陸に渡るまでそれで
いい」

「俺は喰奴系統第二段階、修羅第一段階」

パラメーターを見せる、竜殺しの女性プレイヤーは五属性が全部
第二段階でレベルも高く十五になる。光に対して偏見や敵対心はな
いらしく問題ないと判断して仲間に入れた。修羅の方には興味がな
いらしくレベル上げで放浪していたらしい。名前をコギリと名乗った

神殿に入ると係の管理人が忙しそうに内職の闇ルートに必要な知
識を本に複写していた。

軽く笑えた。

「やれやれやつときたか喰奴第二段階のポーンバスター試練は簡
単だと言うより現場の判断で変更した雑用係になってくれ、ほんの
半時間だけ本の整理をしてくれ」

「別にかまいませんがご苦労様です」

「全くだ闇ルートのプレイヤーが苦労してここまできた、竜もこ
れで五体目だ管理人として応援しているが中立ルートのプレイヤー
も陰ながら応援させてもらうよ、少ないからね」

本の整理二人に協力してもらった、元々闇ルートのプレイヤーの
ために詳しい本の整理を行っていた。クリスは運搬し俺が本棚に収
める。修羅は大人気らしい後から後にプレイヤーが集まる。

三十分間働き第二段階の二つが付与される、修羅女と闘鬼で女性

なら修羅女になる。男性の方を取りたければまた働けば大丈夫だが完全に習得していないと意味がない。

残ったクリスの第二段階はほど遠くコギリが案内したモンスター多発地域でひたすら倒す。丁度戦士、魔法使い、僧侶といった感じでパーティを組んでコギリも魔法にはどん欲な方で攻撃魔法以外も覚え始めた、俺は第二段階を完全にマスターしやっと第一段階の二つを習得するクリス、闇ルートの知識で材料を集め換金しまたは材料から高価な換金属材料に換え逞しいコギリは大学生のゲーマーらしい。科学的に魔法の効果を説明できるほどの知識を持つ。俺達が高校生というのは何となくわかったそうだ。

ただ敢えて話さないが俺の性別は男だ、しかし見た目は女性だ。その事でコギリは敢えていわなかった大人の配慮だ。

一段落つくコギリが安心して一息つける無属性ルートギルドキヤンプで一息ついていた。

「無茶苦茶楽しい」

クリスが有料の清涼飲料水の果実を磨り潰した飲み物を啜りながら話す。唯一防具を持つ、光ルートは武具の購入ができる上に道具や様々なメリットがある。

「攻撃が下手くそだがな」

コギリが呟く、ジョブはないが装備も自家製らしい呪われた甲冑は闇ルートに完全に入ったため解け、代わりに闇ルートの防具である材料合成技術での防寒具の衣に体を覆う長衣。

「敢えて話すが俺は男だ、何故か性別が変わった」

「やっと言ったか、困るぞ性別が違うと」

「たぶん二重の禁断魔法を覚えているからだと思う」

「それもあるな、確かに二重はない、今までで初めてだ」

コギリはよく言えば落ち着き気配りに心を砕く性格、配慮もあるだろうが仲間から距離をとるようなクールな一面がある、必要なら組むが、必要なら孤高の一匹狼を目指す性格だろう。

「喰努、魔獣、修羅、修羅女をマスターか何とかここまでできた感じが強い」

「攻撃魔法は覚えないのか？」

「どうも合わないらしい、攻撃魔法を使うぐらいなら素手で倒す」

「楽しいぞ合成魔法もあるし」

「それは楽しそうだが面倒だ、基本的にゲームは嫌いだがこれは楽しい」

コギリが鼻で笑う、ハマっているのは明白だ、現実には楽しい、食べるのはマスターになる方法の中で最短距離を歩くようなモノで調べたが食べることは絶対に効く攻撃法らしい。

「ゲーム嫌いがあそこまで前衛に立ちたがるか、嫌いではなく合っていないゲームだけだったただけだ、ゲームには相性があるから少なくともこのゲームは受ける、ただ相場高いストーリーは何かの伝説のようだったが、魔法での戦闘さえあれば文句はない」

「ストーリーを求めないアクションが癖になったということか？」

「知らないだろうから教えておこう魔法は確かに魔法となっているが現実には様々な科学的な構成がある、つまり全部マニュアルなのだ、優れているのはそこだ」

「何気なく自慢しているなどうしたクリス」

「二人は強いじゃない、でもあたしなんか足を引つ張ってばかり、正直雑魚扱いよ」

「何気にしていたのか、得手ふてもあるだろうが、私は剣を魔法の効果を増幅させオーブにした、闇ルートは技巧派が多い、ヘビーコーザー向けだ」

「武器を変えてみようかな」

「得意な武器は？」

「一応運動系の長刀部なのよ、でも冴えなくて、訓練の一環で大鎌にしてみたわけ」

クリスがパラメーターを表示すると妙な点がある、スタミナの所が底についている。当人も驚く俺もコギリも驚く。

「えーと、どういうこと？」

「さあな、二段階目の癒し系統に人に尋ねることが一番だろう」

出発になり目的地に向かう、五属の攻撃魔法と防御魔法、癒しの魔法を習得したコギリの攻撃は的確且つ精密な雷系と動きを止める風系の攻撃が多い、それを教えると今後の克服課題にするらしい。

俺はマスターしきっており、適当に斬りつけることが全般でコギリから言わせれば典型的な戦士タイプらしい、悪くいえば単純であるがそれだけの強みもまたある常に動き相手の攻撃を防ぎコブナリ程度なら一撃で倒す剣士として才能があるらしい。

何よりも攻撃方法を躊躇しない非情さを高く評価された。道程で現れるのはコブリナ系統のレベル十まで魔法を多用するシャーマン

がいるが、基本的に弱い強いところでゾンビ系統のボウガンナーがいる、スナイパーの様に隠れて狙撃する、毒を使わないと言えば使うが、頻度も少なく装甲を貫通することもない相手にしないことが重要で到着した神。

殿には光ルートと闇ルートのエリアのようなキャンプがある、両方とも回復の魔法は重要で残念なことに回復道具が存在しない、魔法か拠点かの二択だけだ、放っておけば再生していくがやはり時間がかかる。カルマで判別するなクリスは光だ、俺も光に入る、ただ竜殺しのコギリが居るためプレイヤーは困惑気味だ。

第三章紡がれる日常3

神殿での管理人は非常に困惑していた二つに分かれ勢力争いならぬ試練の手助けで覚えていくプレイヤーが多い。

「試練にならない試練を受けにきたプレイヤーか」

「まるで試験官のような話だな管理人」

管理人は全員ありふれた日系会社員の顔に服装を中世の欧にしたような感じた。

「隠しても意味がないので話すが、抜き打ちテストを受ける側だ」

管理人からの言葉にコギリの顔が引きつる、事情を説明すると真剣に悩んでいた。

「抜き打ちテストを行う査定人か、しかも高校生なら抜き打ちテストに最適か凄いいプレイヤーと組んだな、所で質問だがクリスのスタミナがつきている」

「それはそうだろ、装備を買うとき説明されると思うが重い格好をすれば当然に体力に影響しスタミナが増減する、軽ければ早く多く、重ければ鈍く堅く、つまり重量オーバーだ」

コギリが気づかなかったことに寂しく笑う、どうも博識を気取っていたらしい。考えてみれば当然のことだ中世の甲冑を最軽量にして二十五キロ、現代歩兵が身につける重量は二十キロ、理由は重い物を持てばわかる。

「つまりスタミナの回復が間に合わない重量だ」

「ってそんなこと有った・・け？」

「買物するとき説明される」

クリスが重い物らしく要らない部分を外していく、最終的に胸当てと腹当て、太股まである長靴と具足、防具として片腕の小手、なるべく軽量化に励み要らない物を捨てていく。

こうしてみると珍しい外見だ、中世の布地に地味な色のミニスカ―ト、太股の半場まである長靴と具足、上半身はノースリーブの地味な色の上着に片腕に防具の小手、肩まで手袋で覆い、不思議な格好だ。下地になる顔は高校生らしく澁刺としており性格である行動的な印象の少女だ、まさに冒険者にふさわしい。

対してコギリは知的そうで美人だ、服装も運動より防具というより防寒具のようで厚手の衣類は体型を隠し派手に動くような外見ではない、どちらといえば屋内での研究などをしている方が似合っている、整った顔立ちはより玲瓏とした顔でいるがうっかりさんの所もある。

「対照的な二人だな、サバイバルの屋外冒険者と屋内専用魔導士」

俺の不要な一言でコギリが笑顔で、一瞬で構成し終え詠唱し放った、得意の風で動きを束縛し雷で感電させ麻痺したところに連携の火炎を放つそれで視界が奪われると床を破壊する、最後に確実な氷で打撃を与える、一瞬で構成し詠唱し放つ、低レベルの冒険者に見えるような真似ではない。超熟練者だ。

「いてえなぶっ殺すぞコラ」

「俺の台詞だ！仲間を攻撃するな」

「乙女のハートが木っ端微塵」

「熟練しているのはわかっている、優れた頭脳でそして的確な技

能だ」

「そう褒めるな、まあ二度と言っな」

コギリが蒼く染めている巻き毛をはねながら何気なく俺に話す。その顔は珍しくも直感の閃いたような一面だ。

「もしかして不要な一言で立場を崩す性格か？」

「言い換えれば一言多い」

「クリス？どっちの味方だ？」

「中立」

「クリス同僚だろ、相棒だろ、助っ人だろ？」

「だってねオカ野郎に肩入れするのは・・・道徳的に犯罪でしよう」

ここに黙って成り行きをみていた管理人が拍手する。注目が集まり。

「二重の法則です、禁断の魔法を解き放てば最初に甲冑、次に性別が反対になり一番か、最初に選べば遺伝子からの情報で二度と変えられなくなります、選びました？」

「鬼よか鬼だ、選んだ」

「不幸ですが甲冑だけは外せます」

「意味ねえゾ役たたねえナ」

「同じ目に遭いますかプレイヤー？」

「ミスマセン、ゴメンナサイ、私日本語苦手」

コギリが撃退され甲冑を外すが最悪なのは衣類まではがれ、下着だけになる女性の二人が興味深そうに眺めているが寒い、あわてた管理人が衣類を探すが無い。コギリが火炎を作り、暖をとる、男性用以外つける気は全くないため女性物を拒否し続け、管理人が本来

「ご褒美になる中世西洋の衣装ならインパクトはなかったがその時代に唯一運動向けなのが騎乗服、管理人がサイズを合わせ凄まじく寒いから肌寒い。」

「死ぬかと思った」

「だろうな、寒そうだった表面積の関係上寒い場所が多い女性の気分は貴重だ」

「コギリ何気に不機嫌だぞ」

「理想的な体型をしているからだ」

「すでに俺のセイ？」

軽くクシャミをする、寒さで死ぬかもしれないと沖縄で思っている俺ぐらいだろう。管理人がさらに厚着しなければならなかったためにフードマントにスカーフに、ご褒美の防寒+1を付与し、何とか春は心地よいなでも済む。

「甲冑どうします？」

「性能は良い方だな」

コギリが呟く、俺達が大騒ぎしている間に次の試験を受けるための来訪者が現れる。その気配に急いで甲冑を身につける。またしても呪われヘルムの中で嘆息する。

「試験はクイズに答えることです、ゼロ次は」

「ゼロに限りなく近い1」

「いえ知恵比べではないのですから1で結構です」

コギリの第二段階癒しの魔法、クリスの癒しの魔法が宿る、通常の魔法は暖かみや安らぎを感じさせるが俺は呪われた甲冑の中で嘆息するしかない、査定にきて何も見つけられなかったら次の仕事は

ない、安定した収入は常に学生の味方だ。言い換えれば失うわけにはいかない大口なのだ。

「査定も楽じゃない」

俺の独白に管理人は苦笑し、仲間の二人は何ともいえない顔になりやってきたプレイヤーは意味がわからないようでキョトンとしている。

「色々あつたが達者で」

俺達が神殿の出入り口に向かう。あれはやけっぱちの問題なのだろう。

「次は聖なる魔法だな」

「単体に体力半減魔法か、必要なのか？」

「後でわかる、不必要に見せかけて必殺の魔法だ」

「お気づいた？」

「査定人はわかるが通常プレイヤーはわからないことが、ストーリーの関係か？」

「俺が通常魔法を使わない理由は難易度を上げるためだ、だがクリスは逆を選んだ、王都につけばわかる」

それを言うと一応推測の言葉をコギリが話した。聖なる魔法とあるが効果は半減それから導き出されたのはレベル差があるモンスターの体力は高い、現に竜と戦う闇ルートのプレイヤーは苦戦していたそれを半減できるならそれだけで強みだ。

「おいしい、正解は聖なる魔法の系統から派生する補助魔法」

「使用者がこの程度か、答えは敵味方を識別する魔法効果だ、そ

れもオートでリトマス紙だよ、混乱する戦場で確実な魔法は？」

「なるほど唯一味方には効かないだが敵なら打撃を受ける、なるほど識別魔法か」

「相手が俺達のようなプレイヤーの外見なら識別は難しい、必然的に必要になる魔法だ」

「王都に何がある？」

「予想だが国王はすでに死んでおり亡骸が王国を司っている、闇ルートの方が勝手なことをしても放置しているのが現状だ、おかしいだろう？ 妙だと思うこの時代の国王は絶対王政に思われがちだが国王が邪魔ならと思う輩もいるわけだ俺はゲームが嫌いだ、だが歴史は好きだ」

「確かにあると思われるイベントか、当座はマーモに居るわけだな？」

「いやマーモのイベントはそれが終わりだろう、最初に警告された対をなす存在がいると、俺達が居るように裏で画策する謀略家も存在していると思われる、そもそも最初に教えられた政権交代の歴史ストーリー二人並びて夜の空に戦の炎をつけては嘆き、悲しみ、怒り、笑う、推測される歴史の暗部があるわけだ、気になるのは二人並びてだいつ二人が並ぶ？ ならば少なくとも有利に運びたがる者が居て変だと思うか？」

「国王傀儡説ではなく死亡説か、手がかりは？」

「王都の機能であるカルマの凍結だ」

「唯一闇側が行動できる、探偵か？」

俺が頷く、コギリが考えてみる、同じく答えが導き出される。一部に腹黒いモノを抱えている者が入り込んでもおかしくないむしろ必然的だと。闇ルートのプレイヤーが集まる修羅の神殿に使いを走らせる。俺達は中立ルートのキャンプに向かった。

二つのギルドの運営者は証拠がないことを理由に荒立てないこと

を話したが妙だという意見と俺達の意見を強く支持した。一端王都にプレイヤーが集まり戦というより王都そのものを疑っている。俺達が一応はいる、何事もない。王城までのルートを気づかせないように慎重に進める、最終的に王城に入るとき邪魔するようにプレイヤーの一人が立ちふさがった。最初に気づくべきだった王城に意味もなく屯している冒険者の姿を。

「竜殺し、マーモからでるのか？」

「語るに及ばず」

俺が抜剣したレイピアが冒険者の心臓を貫通し信じられないという瞳で即死する。俺が静かに宣戦を布告した。それに対し城壁の外で待機していた二つのルートの冒険者に合図として火災をおこす、怒濤の勢いで数百人の冒険者が雪崩打つ、王城に屯していた冒険者が籠城する様子でいたが潮時だと判断した者が城下町に逃げ込むと数人を残して逃げる。

「頭が切れるなポーンバスター」

コギリが話す、残った数人は竜殺しの戦士だ。マーモから離れたはずが存在していたわけだ。

「敵は強い方がいいってね」

「是非もなし」

コギリの魔法が構成され精密な魔法を紡ぐ、俺が前衛に駆け出す、クリスが唯一大鎌を構え城門に立ちふさがる、四人の竜殺しは連携をとることなくそれぞれの武器で応戦する。

「何があつた、どうしてだと聞かないのか？」

「闇は闇に散って謳え、狗は自ら吼えぬ」

俺の斬撃を一人が受け残った三人のうち二人が左右から攻撃する、残った一人が回復の魔法を詠唱し三人のスタミナを回復する。戦術的敗北を実感するのはこの後だ。

怒濤となった冒険者は勢いよく城に集まる敵からすれば兵を逃がす機会だと判断するだろうが愚かだ、監視していた巫女が城門を閉める出入りが禁止になるポーンの襲来だ。倒さないといつまでも閉まる。そこで初めて管理人の中で現状に精通している者が居ると相手はわかった。

構成された本来なら二重や連携すら難しい魔法構成を五重に展開し五属性の第二段階の魔法詠唱を終わらせ魔法の嵐が吹き荒れる。万能系中ダメージの核熱魔法。本来は五人の合成魔法だ。それを一人が行使したことに四人は驚愕の中で焼き焦げながら恨み言を残し倒れる。

「奥にいくぞ」

「悪いな大魔法らしい、疲れたオフル」

コギリの声は弱々しく、眠るように倒れる。かけるべき言葉は決まっていた。

「またなコギリ」

奥へと駆ける、主犯格の者を知っているであろう巫女の所に到着したときには一人のプレイヤーが居た、顔つきは平凡な悪気もない単純に盛り上げるための画策と主張するゲスだ何よりも人質を取る

うとした行動だ。

言いかけた所でレイピアを投擲する喉を貫通し声の代わりに血反吐が出る、予想外のことに呆然とクリスの一撃を受ける恐ろしい剛力で上半身と下半身の間に鎌先を通す。絶叫があげられプレイヤーは即死する。

「ツリだとな」とけ

俺が刺さっているレイピアを抜く。砂のように溶ける。

「色々とありましたか勇者殿」

「王都の管理人も大変だな害虫駆除の料金は割り増しだ」

「一時的に事件を調査します、次回もご期待します」

俺の視界が揺らぐ、俺のゲームが一時中断され現実に戻還する。培養液から出て、シャワーを浴び、私服を着込み、栗栖野と合流し報告をする。

「やっと表になったか、我々としてもプレイヤーの行動だと意見が分かれてね、手を出せなかった」

「またお尋ね者ですよ」

「最高のプレイだと評価が高いよ報酬は考えさせてもらえないか、いや割り増ししたいが、君の行動はプレイヤーが決めるべきの気があるってね」

「正確には俺達ですがコギリはどうしました」

「彼女か、恐ろしい技能だよ、同時五重構成詠唱、たった一人で最強魔法の一つを行使したあれは培養液で医療機能もある彼女の場合二十時間の過労だよ、ハマっているらしい」

「よかったら住所を伝えてもらえませんか？」

大江戸主任が頷き、俺達夜になる時間に帰寮した。出来事を話す気はなかったが一波乱あったゲーム初日で疲れ果てピザを食べた後に眠った。

気づく朝方で支度し外客を待つ、コギリが現れたのは朝食が済んだ頃だ。

大学生で十代最後の年齢の十九歳で理想的というよりグラビアアイドル並みのボディ。ラフな格好で現れ挨拶して食堂で話すべき事柄を纏めた。

「事件では圧倒的に許せない行動だと非難されているが、管理人側も困惑しているプレイヤーがプレイヤーを罰した、導き出されることはゲームの自立心を妨げることになるのではないかと、管理人側に強い処罰を求めるプレイヤーが多いが規定によると闇側の行動として問題ではあったがやりすぎた遊びの一つで片づけた」

「で闇側の修羅の連中は」

「許せないが圧倒的だ、竜殺しを金で雇った行動ではあったが、どう考えてもプレイヤーとしての行動ではない、ゲーマーとして当然のモラルに欠ける行動だ、良識であれとはいわないがイカサマをするような連中とは連めないとして新闇ルートギルドを立ち上げだ、どちらかといえば中立派に近い通称影派だ。」

今回の事件はプレイヤーが罰したが結果として我々はお尋ね者になった、純闇派からは刺客がくるだろう。

光側の動きがなかったが今回の事件で両派の対立は激化するだろう。私が提唱したいのはネットワーク構築だ。光も闇も無属性も情報を送れば闇が濃くなる、それを防ぐためのどれにも属さない情報ルート」

「管理者側に言いたいことは？」

「最低限マーモ島の管理だけはしてほしい」

携帯で情報を伝える、大江戸開発主任は最低限のマーモ島の管理を行うと話したが最初だけに難しい話でもあると。査定人に選ばれたコギリと行動や情報の交換を許可し現在の混迷するシルメリア大陸の事件を独自に追ってほしいと告げた。ゲームでは事件の調査が進められているが俺達に渡したい物を渡すために大陸との港に人を待たせていると。

第四章紡がれる日常の終わり

モノレールで向かうと人が待つていた、三十代前半の男性、ありふれた人物に見えどこまでも高い領域に存在するような神々しい雰囲気を持つ。俺をみると挨拶した。

「アリアベルタ・デ・久志、通称ヒートだが君には困った心当たりは知っているね？」

「もしかしてロシア人？」

「ロシア語は話せないがな、通称司令だ」

接近すると一瞬で捕まえられた、警備兵が動き捕獲され専用都市内部に連行された。二人は関係ないと主張したがそれは調べがついているので問題なく解放され、俺は小此木博士の研究室に連行された。

「さて会社の情報流用事件だ犯人は二人、一人は技術開発部門科学者、一人はヴィーナスから信頼されている学生探偵の一人、さてどういう見か？」

「老人に頼んだのさアルカイザーを超えられる力がほしいとね」

思いつきり殴られた、喋るなという警告であるが反骨心が強いために勢いよく変身した。それは予想された行動らしく司令が変身する、対アルカイザー能力を発揮するために妖魔の武具を解放する、変身し最強の座にいる男は苦悶の顔に一瞬で地に伏す。それを信じられないという顔で警備兵がみる、その時に警備兵全員を倒し変身を解く。

「小此木博士、俺は仕事があるから行くぜ今回はアフターケアだ」
「倒したな？」

「ああ小此木博士が組み立てた能力で打ち勝ったあんたは最強を作った」

俺は研究室から出る、小此木博士は泣いていた、うれし泣きにする達成された悲願だ。俺は薄いもの、一人を倒したことに満足し娯楽部門に向かう。娯楽部門から俺のことで警備部門と対立しており間違いだったと話、警備兵が確認すると事件から関係がないことが証明される証言があるため問題はなく、通された。実際にアルカイザーが破れるわけにはいかないのだ。

それは絶対にあつてはならない、それは知っている、だから次のアルカイザーの改良で小此木博士の技術が有効に活用されるそれだけだ。

「医療を受けるかね？」

「大江戸さん探偵が彷徨くと不味い立場の者も居るのですよ、戦役の際に調べられては困る話を聞いたことは？」

「済まない」

「好いですよ？アフターサービスが仕事を招いただけです、今回のことはまあサービスの一環です、少し派手でしたが」

話していると警備兵の代わりにアルカイザーの一人が現れる、派手にやらかすつもりらしい。

「技術開発部門のコスプレだ、趣味人がいるらしい、しかし凄い少年だな、どうやって司令を倒した、なあ紛い物」

「記憶にございません」

「そう言うことにしておけ今回は借りと貸しだ悪かった」

ヘルムを外した顔は至って平凡な中年男性だった。ただ瞳が愉快そうに笑っていた。そして詫びの言葉と握手し記念写真を撮り去っていく。

もちろんコスプレだ、コスプレ以外ではない、当たり前だ、常識的に考えてとある説明されるも何もあんな現れ方にヘルムを外すことはない、この十六年間沈黙していたアルカイザーズの一員が常識はずれの行動はとらない。もちろん証拠の情報などない。だが都市伝説の一つとなるのは避けられないだろう。

娯楽部門で大江戸開発主任は困った顔で俺に渡す物を見ていた。本物としたら賭なしに特別報酬だ、技術開発部門が俺達用に改造した培養液カプセルだ。離れ業をしたコギリには相当な金額がつぎ込められた。俺用は少しの改良だが大場に違う。栗栖野のカプセルは緊急リミットを脳内麻薬だけで解放された栗栖野の能力を底上げする特殊な情報機材が積まれていた。総額にすれば億の単位だ。

「今回は正式な依頼になる、ダイブからは管理人を通してでしか話せないからどうする」

俺達がダイブする、風景が変わり、俺達がマーマ王都の入り口に現れる。外見に変化はないがパラメーターに一つの機能が追加されていた、クイックリセット機能、一時的にゲームの機能を停止させる能力、ヴィーナスの技術力が高いことは知っていたが常識的とは限らないらしい。

「やりすぎだ」

コギリがばやく、俺が頷くがクリスは使おうと指を動かす二人で止め港に向かう前にマーマ島の各ギルドの情報把握を行う、事件でお尋ね者になったが正式ではない拠点は放置され野良キャンプや様

々な村や神殿地域にある勢力の拠点は、お達しでは保護するようにしている。

純闇ギルドは沈黙していた、今回の行動で唯一非難しなかった、いや出来なかった、帰る場所が非難するわけにはいかなかった。わかつているだけに苦しい立場のギルドの運営者に挨拶だけで終わらせた。

港に到着すると一人の浪士が居た、西洋風が当たり前の風景に対し純和風の袴に胴衣、日本刀を腰に下げ港で趣向品のキセルを銜えていた。

「君達か、快拳なのか少なくともマーモでは好意的だ、定期便の船に魔獣がでるイベントがある、だが魔獣殺しがないと苦勞するだろう、作ってみたが効果は知らないぞ」

浪士が懷から宝石を取り出す、受け取ると陽炎のように消える。

「魔獣殺しが必要になるまで深刻のようだな」

「並の連中では勝てるような相手ではない、必要になるが作成方法から何まで秘密だ、管理人が絶対に話さなかった知識だ、大陸では一つの宝石が奪い奪い合い、そんな修羅場らしい、それは紅玉と呼ばれている、膨大な魔力や体力に変換できるレアアイテム、それを使うことで小国家を攻め滅ぼすに至る兵器が確認されている、何でもありな様で厳密には正しい知識や様々な技能がいる、戦闘力もしっかり技術力もしっかり」

「じゃ今の人は？」

「闇派だろう拠点に入れないために技術力は高いがあの男足下に」
「単なる灰よ、煙草の原料を見つければ作れるからなもしくは動物から」

「いや徹底した和風だったと思って下駄よ」

船が来るがよく考えると船に入る渡航許可書がない。船をみながら渡航許可書を持ってにいる人に複製を作るだけ、待つてほしいと説得するのに時間が掛かった。

偽物の精度でわかるらしく質の悪い物はバレ賞金が増える、ついでにカルマポイントもマイナスになる。財宝を探した方がいいという良心的なプレイヤーも居たが、正式な依頼を受けている側としては一刻も早い大陸渡航を目的として苦心の末に作り出し密航した。

しかし密航した船舶は不幸にも魔獣の襲撃を受けプレイヤーが全滅、船としての機能が大幅になくなり当然密航している俺達が見つかる。捕まり漂着した大陸南部のグレートシルメノア湾のユターラ町で最悪なことに光ルートの王国がある付近だ。

当然のように牢獄に入れられる。助けも何もあつたモノではない。

「脱走することに異議は？」

「開けられるのか？」

「確認したが隙間に門を入れるだけだ堅く細い物として俺のレイピアがある」

唯一の灯火の蝋燭を使い扉の隙間に剣身を差し込むテコの原理で門を上げ、脱走する。邪魔だてするように騎士と兵士が現れる、屋内のために重装備の甲冑を着込み、一撃を受けても倒れない魔法の三重構成詠唱での万能系核熱小魔法で吹き飛ばし突破口をこじ開けて市外に出る。

丁度連絡を受けた騎士より強そうなプレイヤーの聖騎士と表示されたプレイヤーと出会い頭に切り結ぶ。

「大人しく捕まれ密航者」

「悪いが処刑されるのはイヤだ」

剣を構える聖騎士は召還の魔法を使い下級に当たる騎士を召還し増援を次々と増やしていく。

「分散するぞ町の外だ」

返事の代わりに魔法が解き放たれ家屋が燃え上がる。その間隙を突破口に逃げ出す町の外に到着する、二人が現れたのは直ぐのことだ。聖騎士も現れ事情を話した。

「現在混乱としているが一つの秩序が生まれようとしている、紅玉の力を借りた中立側の冒険者ギルド、頻発する国家の軍事衝突に歯止めをかけようというわけだ」

「で本題は？」

「噂には聞くマーモ島の謀略突破、あの時光側は行動に移せなかった、だから国家間の調停を取り決めたいと思う、そこで闇側に対する使者として君達を選んだわけだ」

「ではなぜ捕まえようとした」

「功績になると思ったそれは私欲だ付いてきてほしい」

お互い顔を見合わせるそして決まった。

「了解した」

聖騎士は安堵の吐息を漏らし案内する。現在大陸では群雄活況状態で大勢力と呼べる存在がおらず無秩序と呼べる。案内された王都はこぢんまりとした小さな町だ。

王都に入ると本来は攻撃してくる騎士と兵士がいるが、機能が止められているらしい。王城に案内されるが館と呼んだ方がいい。ど

うもささやかな国らしい。

国王は若い騎士だった。どうも騎士同士の国らしい。

「竜殺しコギリ、勇者羅刹、剛力のクリス三名をつれて参りました」

「おうよかったぜ、国王成り立てなんでそこんところしく」

聖騎士が嘆息する親近感が非常にわく。

「手っ取り早くいえば、属性による憲法制定の母胎になる条約の締結だ小難しいが必要だ、金も払えない貧乏国家だが切り札がある質のよい塩だ海にも面している将来性はあると言うことで、出世払いでいいか？」

国王の物言いに俺達は絶句していた、その後おかしくなり笑った、それを承諾し判断し手紙を渡し勢力の情報がかれた地図を渡す白紙の部分も多いが大陸南東ニューサエズウェルズを占領した光小国家郡、大陸北東クインスランドを占領した闇側小国家郡と部族郡。北部地方は白紙で南部サウスオーストラリアも王国が一つあるだけ、西部ウェンスタンドオーストラリアに関しては立ち入り者すらいな

い。
聖騎士が光側に対する使者になるらしい。俺達は闇側の北東部に向かう。正式の町などは数える程度しかない残りは開墾や地力で作るだけ。感心するほどの開拓精神で俺達のような派手な事件を暴くような冒険者は一握りだ。

闇側の領土クインスランドは光立ち入り禁止の看板があった。

比較的大規模な都市国家混沌たる同盟を訪ねた。

国王に謁見し手紙を渡した。何度も読み返し闇側で話し合った後

時期を取り決めることになった。

返答の手紙を渡されお礼に魔法書を渡された、魔法の原理から現在開発されている様々な魔法情報がかかれた物だ。魔法のエキスパートコギリが愛読ページを捲ることに関心の声を上げていた。喰奴ルートは俺一人らしく闇側でも同類は見あたらなない。

とある闇側の町で乗り物になるコカトリスを購入し高速で戻った。二つの勢力の共通する条約の締結は物議を醸し俺達は時間を潰すために西部に向かった。

コトカリスは途中で放し、徒歩で向かう。

適当な場所を見つけたのはゲームの時間で一週間程の場所だ、偶然の砂金を見つけたコギリは金鉱脈があると判断しイベントらしく探し始めた。結果として金脈三つに希少金属のマテリアルの鉱脈一つ、十分な場所だ。国を興す気はなかったが鉱脈の保護や開発から近くの正式な村や町がありそこでノンプレイヤーを雇い働かせ金と希少金属の開発を行っていた。

俺のアイディアでノンプレイヤーを大規模に雇い、冒険者ギルドに資金を提供する仕組みを作った。これも予想されたイベントらしく盗賊が襲撃するイベントが発生し被害は深刻な量にまで達した。人手が足りず冒険者ギルドを通し護衛や討伐イベントを行ってもらうべく使いを出した。現れたのは冒険者ギルドから依頼された中立ルートの冒険者の旅団、傭兵団でもあり職人集団でもある、金脈と希少金属の鉱脈の護衛および開発を依頼し仕組みとして俺達が働かないでも儲かる仕組みになる。

鉱脈を探し西部を放浪した。西部は鉱脈の宝庫らしく無数に見つかりと相場が値崩れするがあまりに多いので中立ルートの冒険者に売り払った。それにより大陸の西部に中立側冒険者が集まるようになり大規模な国家作りが始まった。三権分立の観点からノンプレイ

ヤーを雇いローマの様に元老院や皇帝からの政治機構、軍団からの軍隊制度、発見者を保護する法律が制定され膨大な発見をした俺達には資金があるので国家に寄贈した。お礼に俺達三人に領土を与えた。三つの金脈の周囲に伯爵領土として専属の護衛集団は従騎士になる。

豪遊する性格ではないので魔法の有効性から開発する学園を建設し士官を育成する軍事学校、教育、開発、研究機関を作り財源の許す限り支援した。

そんな俺達の行動は国家に大きな影響を与えた自己中心的な行動が目立つ中立ルートの冒険者に俺達のような冒険者を目指すようになる、世界を放浪し人助けやより良くする事柄や仕組みを作ることそんな考えの集団が生まれ、三つの勢力が秩序をえる場所南部オーストラリアを非戦闘地区と取り決め戦争においても進軍を禁止した。そんな歴史が長く続いた。

現

実に戻り中立ルートの者に歓迎され娯楽部門でパーティを開いた。少なくとも娯楽部門の狙いは当たったクチコミで自由度の高さから空の軌道の評判は高かった。

そんな時光側の聖域と呼ばれる聖騎士の国の国王になるプレイヤーが会いに来た。

「おかげさんで何とか財源になったありがどな」

若い大学生の年齢だ、体育会系らしいが生徒会との関係もあるそうで体感したと、ただなぜか人望があり光側の騎士道を重んじるプレイヤーに押され国王になり王国を作ったそうだ。

闇側のプレイヤーも集まりゲーム世界での金銭から技術提供があった、そして闇側が見つけた古代遺跡の情報が流れた。いずれ戦で戦うが現実まで争う気はないらしい。当たり前前の良識だ。

空の軌道に参加しているプレイヤーは世界中にあるヴィーナスの支社での行われているらしく正式公開が待ちどうしいともっぱら評判だった。

聖騎士の国王と俺はハードボイルの話題で盛り上がりコギリはひたすら魔法情報を聞き回り、栗栖野は護衛の集団とカラオケをしていた。

パーティが終わり帰寮した。

第四章紡がれる日常の終わり（後書き）

誤字、脱字の指摘等、ご鞭撻下さると助かります。
観想などもお待ちしております

第五章 獲物と獲物

先輩の二人を誘うと考えたが二人はゲームには興味がないと断った、大江戸開発主任にきてもらい熱く語ってもらったそうすると金を払い参加してみると話した。現実には厳しい強行軍だったため足が棒になっていた。医療技術が使われていなかったら泣けてくるような痛みだろう。

ネットで空の軌道に参加したがるゲーム好きが正式発表を待ち遠しいと好評だった。

ただ今までの酷評からの反省点も多かった。そんな一日が過ぎ三月最後の日きた。ゲームにダイブする。

最近の流行で西部の衣装は男性にしる女性にしる、肌の露出が多い防具も部分的なモノが多い、現実には暴漢に襲われても現実の法律に違反する行動はないため、男性は大いに喜び同時に大会がよく行われた。

三つの鉱脈の領地は買い求める商人相手に商売を興した者がいて数百人のプレイヤーが暮らす、俺達は特にすることはないので冒険に向かった。交通機関の発達から駅馬車が作られ乗り継ぐことで様々なダンジョンや遺跡に迎える。

現在の需要と供給で古代遺跡に眠る装備は貴重で高価だ。もちろん製造技術が判明すれば一大財産だ。そんな山師が集まる大陸中央にある灼熱の砂漠にあるアマデュース湖の遺跡は活気にあふれていた。手はずで遺跡の情報を提供する古代遺跡の学者との合流がある。

学者は中学生の子供だった。ただ頭がよく飛び級で大学に通う学生。

「ローマ神聖帝国の伯爵の三人か」

「ああ小さいから小学生かと思ったぞ悪いな一言多くて」

「気にするなおまえさんら三人の評判はいい特に貧しい学者に対しての資金提供は感激した、学者からの情報提供だがひとまず宿に行こう」

学者に連れられ到着した宿屋は木製の珍しいことに丸みのある建造物だった。オアシスでもあるため水が豊富で綺麗な中庭もある。宿の主人は雇われたノンプレイヤーだったが愛嬌のいい踊り子だった。テーブルに案内され学者が持っている資料が渡された。

「遺跡のことは闇側より伝わった、ただ欠点として技術にどんな闇側だ、歴史調査やそういった古代情報の研究はされていない、我々学者ギルドは古代遺跡の謎を解明し、古代にあった戦の背景を探ろうと思っている」

「では学者さん、話してくれ資料は歴史的専門用語が多く時間がかかる」

「だと思っただけにまとめたセイで欠陥が多い、まあ説明というか我々の研究で判明したことは二つの月の事だ古代遺跡に必ずある紅い涙を零す下弦の月、蒼い色合いの月、この二つから古代遺跡は二つの月の住人が作ったと思っている」

「それは早計ではない、モンスターとい落ちもある」

「ならば問うが、古代の文献にある嘆き、悲しみ、怒り、笑う、この四つは人間やそれに類似した種族の存在がない限りあり得ない、理由としては前文にある戦の炎を見つけては」

「確かに、その点は同意しよう話を続けてくれ」

「うむ、続けるがベルテセルバ戦記を知っているか？」

俺達は沈黙した、知らないと言うことになる。

「あれは二十世紀に作られたゲームだ、しかし歴史的な背景が存在した、それを考慮すると他の惑星から飛来した種族が月に暮らした、しかし原住民は戦を行った、この点は当たり前になっている学説だ、しかしここからが違う、空ゆく船は死に神の翼、飛行船や飛空船の存在だ、しかしこうとも考えられる宇宙から攻撃されたと」

「それは飛躍しすぎでは？」

「無論だ、飛躍しすぎている現実性がない、そして私個人の推測では人を殺し、もしくは捕らえて月に運んだと思わないか、我らの御霊を地獄に運ぶ、地獄は月ではないかと」

「纏めるが、古代遺跡にある二つのシンボルから宇宙技術を持つ種族が飛来し月の住んだ、しかし惑星での戦をみて止めようとしただが戦渦のせいで住民は恨み総じて戦に向かった。だが思うが宇宙技術を持つ種族と惑星に暮らす先住民では技術格差が多いすぎる、戦にならないだろうスペースシャトルをどう破壊す」

「そこだ、つまり対宇宙兵器があったと思われる」

「にわかには信じられないがそれを探しているのだな？」

「我ら学者ギルドにも意見が分かれる、私は対宇宙兵器があったと思っっているが逆に宇宙側の技術漏洩で対抗する宇宙船が作られたと思われる、他にも学説は無数にある、この遺跡は大規模だ手がかりを探っているが見つからなくてな」

「それで俺達に協力し手がかりを見つけないと？」

学者が頷く、が戦闘技術に関しては自信がないらしくダンジョンその物に入ることはできても戦闘に参加できるほどの強さはないと話した四人目の仲間マキシルだ。

遺跡は大規模な地下ダンジョンだ、モンスターのレベルは高く二十が平均らしい、そして八階まであり広大なダンジョンから広き者と呼ばれている。

湿っぽい地下迷宮が広がる魔法戦闘の専門家であるコギリが闇側

から提供された探索用魔法の応用で明かりを作る、感心したような吐息が漏れる。

マキリルが最後尾にいる、戦闘能力が低く戦闘そのものに向いていないらしく体を動かす動きも雑だ、探索用の荷物を持つ、俺が前衛でふんだんに希少金属を使った魔法強化合金を吸収させた無形の剣は細身からフランベルジュと呼ばれる剣になっている、単純な攻撃力を追求したため屈指の攻撃力を誇り、軽いながらも防御効果もある。呪われた甲冑に闇側が作った重防具を着込み防御力、攻撃力は共に仲間随一、クリスが中衛になる、大鎌に攻撃回数を増やす強化魔法を何度もかけ、最速の手数を誇る、防具は嫌いらしくいつもの格好に強化した部分防具でいる。防具その物を身につけない衣類だけのコギリでいるが衣類の中では高価な分類に入る女神の衣から作り出された金脈購入額同等のローブを着込んでいる。唯一魔法専属の武器にしている。

戦闘になるモンスターをやり過ぎし三階までは無戦闘で到着したが中ボスらしい黒竜が眼前の全身漆黒の巨竜は、その鱗の色が如実に示すとおり黒竜であった。猛毒を吐く獰悪な種類の竜である。しかも掲げた頭部までの高さは、優に城並みの高さがあった。計測から瞬時に情報を把握する、頭頂までの高さの後方にくる尾までの竜の全長は20メートル、黒き邪竜の凜列した、その永劫の氷河の様な目が、俺達の視線と正面で衝突する。視線だけで身体を恐慌させる力を感じる程だ。

ウアアアアアアアア！

俺の獅子吼が広い空間に木霊する、それが戦闘の叫びになり、俺が右側に走る、重防具の魔法技術合成聖獣金属がぶつかり合い金属音を響かせる、遅れてクリスが左側に走る、そして瞬時に魔法を構成し詠唱していたコギリの科学現象系爆裂魔法が放たれる、TNT

爆薬と同等の効果を持つ軍事用爆裂魔法が火球を作り黒竜の胴体で炸裂する、爆風の中、黒竜は死の吐息の目標を分散させられたことに攻撃を迷った。

疾風となるクリスが腰の帯から金属筒を三本引き抜き、投擲を行う、モンスターにふれると粘着液体から発火の攻撃で激しく燃焼する。それに気づきコギリが火炎の魔法を一瞬で放つ。激しく燃え上がる燃料をモノともせずそれを無視した石壁を紙細工の如くに破碎しながら、竜がその黒鱗で鎧われた巨軀を乗り出す。それだけで大地が鳴動し、大質量の生物が放つ、高圧の圧力が岩山の空気を張りつめる、同時に巨樹を何本も抜ったような筋肉の束の左前脚が、俺に向かっていき横薙ぎに振り払われた！

破壊槌の破壊力と風の速度を併せ持ったその超質量の一撃を俺は落雷の速度で体を屈めやり過ぐす。槍の如き竜の長爪が装甲の表面を掠めて走り、青い火花と悲鳴を上げさせる。

刹那後、たわめた体を伸ばし、クトゥーが竜の懷へと弾丸の低空跳躍を決行する。

その腕に持っている無形の剣を竜の軸足、城の大広間の支柱を思わせる右前足に叩き込む！その剣身が竜の高硬度の鱗を断ち割り、肉を切り裂き、赤黒い血が迸る。それは専属の武器の中でも攻撃力に特化しているからだ。

竜が苦悶の咆吼をあげる。

薙ぎ払った左足を返して俺を叩き潰そうとするが小癪な人族は後方に素早く飛び退きかわす。

俺が持っている無形の剣、通称フランベルジュ、紅い刀身に燐光のような淡い光、外見に反し最強の攻撃力を誇り、長さは1500

ミリ、刀身に等しい長い柄から、子供の肩幅ほどもあるその幅広の刃が伸び、根元と中程で湾曲しているその形状は、歪んだ四辺形のようにも見える、竜の黒血が禍々しく濡れて光っている、竜は巨躯を後方に退き、胸腔を急激に膨張、死の吐息を吐くべく大量呼吸吸入を行う体勢に入る！

竜はようやく気づいた。眼前の人族が単なる獲物ではなく、偉大な竜族たる自分を傷つける力を持っていることに。

竜の喉元がせりあがり、まさに死の息吹を放射しようとした刹那。

コギリの魔法専用武器のオーブから砲撃に等しい白刃のプラズマ化した雷球が超高速飛翔する。命中すれば庭園の池程度の水量を瞬時に蒸発させる、凶悪な破壊力を持つ。

そうコギリの魔法攻撃のために俺が時間を稼いだのである。

死の雷球を右前脚で直接に受ける黒竜。瞬時に血肉が霧と化して弾け飛ぶ。

コギリの顔に驚愕の念が走る、竜は瞬間的に負傷を最小限に抑える方法を取ったのだ。

片足を失う激痛に細めた竜の瞳に、瞋恚の炎が色を強める。

あまりの出来事にコギリが活動を停止したそのとき、竜が溜めていた息吹を吐く。

吐息の蛇の毒に似た、ストレプトキナーゼによって人体細胞を分解する化膿連鎖球菌など、欠陥を破壊するプロテアーゼと総称される蛋白質分解酵素が含まれ、血管の破裂による酸素欠乏症で死に至らしめる。それを浴びれば生きながら毒死するという地獄の苦痛の初にして最後の体験しながら絶命するだろう。濁った死の本流が熱烈にコギリを抱擁する寸前、猛禽類の強襲、速度で走り込んだクリスがコギリを抱え、横転する。

毒ガスが地面の石畳を妬く白煙を上げ。

白煙幕に紛れクリスとコギリはさらに転がり、竜の毒ガスのさらなる追撃をかわす。

白煙が周囲に一帯を多いつくし、風景すら一変させていく竜の超破壊力。

完全にかわせず、クリスとコギリは背中や足に毒ガスの一部を浴び、姿勢を崩す。

惨状の大地に這いつくばるコギリを一別してクリスは竜へと向かって再度の疾走を行う。竜はその長大な尾、地上最大の鞭をしなければ、クリスが寸前までいた地面に叩きつけて視界を塞ぐほどの爆煙を起こす。

轟音で大気がびりびりと震える。クリスは唸る尾をかくぐり、さらに右前足を失った、竜の死角、右方へと疾駆する。コギリが戦意喪失している以上、クリスが狙うのは竜の最大の急所たる逆鱗が存在する喉しかない。

飛翔しようと長身をたわめたクリスに竜が軽い吐息を吐く、それでも地上の生物なら装甲なしでは確実に即死する冷気だ。それを俺が受け止める冷気から俺の呼吸器官系が破壊され口から血反吐が零れる、だが戦闘能力はある修羅二段階目の攻撃スキル、乱心の一刀で黒竜の失われた前足の鱗に斬りつける、そしてクリスが慣性と全体重を乗せた大鎌の一撃を天に届かんとする竜の脳天にたたき込む。竜は首を後方に反らせ、必殺の刃をかわす。

このままクリスが着地すれば、竜の追撃で無惨に引き裂かれるのは容易に想像ができた。そこにコギリが戦意を復活し強風を起こす、身軽なクリスの着地点が外れ、竜の尾が低重音を響かせ地面に振り下ろされた、それを俺が受ける、防具を破壊できない一撃であるが、

質量からの衝撃はすさまじく床の石版が破砕する、同時にフランベルジュの剣が降られる尾を断ち切る。

どす黒い鮮血が俺に降り注ぐ、時間は稼いだ、クリスが左側に移動し治療の魔法を俺にかける、肺の凍傷が治りがなくなりスタミナが急速に回復していく。

着地点の流、左前足首に回転した大鎌の渾身の刀身がめり込ませるっ！

苦痛の咆哮をあげる竜が吹き飛んだ右前足でクリスを薙ぎ払おうとする。右前足の長さが足りないためクリスの顔面を掠める。クリスが後方に飛びすさり、額から流れる血を舌先で楽しむクリスの横顔が見えた。

対峙する巨竜の手先が吹き飛んだ右前足と切り裂かれた左前足に何かが蠢く。骨格が再生され、筋繊維と血管、神経網が張り巡らされていき、鱗と五本の指が爪までもが完全に回復するまで僅か3秒弱。竜の高速肉体復元である。

これが高位の竜である。高度な知性と強大な体力と能力を備えた地上最大の生物。破壊をもたらす兵器や技術を駆使しても竜には軽傷すら与えられない。

毒ガスと冷気の浴び負傷した絶望的状况だったが、俺は金属装甲に覆われた鎧の背中は全く闘志を失っていないかった。これが俺の勇者羅刹と呼ばれる人物の生き様だ、あまりにも違いすぎる。俺はコギリを一別して侮蔑の瞳と嘲笑の笑みを浮かべている、嘲笑っている。

高僧のように悟って死ぬよりは戦って暴れて足掻いて死ぬ、単純

だがそれが冒険者だ、故に尊く人々は畏怖の念を込めてワイルドギースと呼ぶ、そしてその端くれたるレイヴンも孤高の鳥の名前を冠するだけはある。

怒れる巨竜は間合いの遠い尾と吐息を主体に隙のない必勝の戦法で俺とクリスを襲う。石壁は倒壊し石畳が毒ガスにまみれる。この世の終演が来たかのような、竜の破壊の力を、俺は受け、

クリスは受け流してかわすが、そう長くは耐えられない。

コギリの様な後方支援可能な冒険者がいる、その為の陽動だと気づき、コギリが完全な皇位魔法の構成詠唱体勢に移る、それに竜が気づき、毒ガスの吐息を吐こうと首をたわめる。

俺が投擲したフランベルジュが竜の下顎を半端断ち割るように突き刺さり、死の吐息の放射を強制阻止する。

爆ぜる自らの毒ガスで顔面を灼いた竜は激昂し、俺を喰い殺すべく上下顎を開き強襲する。だが竜は戦法を誤った、コギリの魔法構成詠唱を阻止しなかったことを、瞑府の底で後悔することになる、竜に概念があれば理解できる話だ。

白刃の超弩級の雷球が再度放たれる、光速度で蒼天の大气を貫き、雷球は竜の首を狙うそれを同じように左前足で防ごうとするただ方角が違い空中に投げられている投擲筒にぶつかり大爆発を起こす、それが煙幕となり全ての投擲ナイフが放出される。

圧倒的な爆発が竜の全身を焼き尽くし嘲るように竜が前足を下ろす。

それが誤りだ、次の瞬間には三弾目の雷球がフランベルジュに突き刺さる。

途端に刀身を伝導体として、竜の体内に電撃が进らせる。

殺戮の電子の奔流は頭部脳髓から首、胴体、内臓を灼き、沸騰させながら、左前足から地面へと駆け抜けていった。

驚異的な肉体再生も脳髄自体が沸騰すれば全身の神経網と内臓を灼かれては発動すら許さない。身体中の穴から白煙と沸騰した汚泥のような黒血を零して大きく痙攣する竜。

俺達の長い間の戦い、長い時も続いたお互いの連携は自然にとれている。

死に瀕する黒き竜。

だが、熱で白濁した竜が苦痛と凶気に見開かれたかと思うと、俺をその巨顎でかみ殺そうと爛れた首を疾走させる。

竜の瞑府への道連れに選ばれた俺は真正面から突進を受け止めた。即死の激突衝撃のはずだったが、周りは今日何度目かの新鮮な驚き驚異的な戦慄を味わう。

俺は風で速度で襲ってくる巨竜の、その下顎部に刺さった自らのフランベルジュの長柄を握り両手に握り止めていた、しかし死に狂う竜の頭部の勢いは止まらず、衝撃で俺が空中に浮く。

「があああああああ！」

鬼神の咆哮とともに石畳を破砕して最大剛力で剣身に回す。鱗と筋肉と骨を焼き切りね砕き留擬身は地から天への弩雷となり虚空へ

と走り抜ける、黒竜の頭部はそのまま切断され蒼天の中空へと舞い飛び、石壁の一つへと激突しそして黒い血の痕を引きながら落ちていった。鼓膜が痛くなるような沈黙と静謐。

下顎の一部を以外の頭部を失った、小山のような黒竜の胴体は、コウモリに相似した黒翼をばさりと一度だけ振り、ある種悠然と傾斜していき、ついには耳を聳する地響きを立てて地に倒れた。切断面から流れ出る膨大な黒血が、天上に輝くランプを映していた。

「コギリ戦意喪失するなよ」

「済まなかったな珍しく失敗ニヤン」

「私が居なかったら即死よ？」

「正義最後に勝つ」

「おう坊主楽しかったか？やはり竜はいいな」

「変態と化け物の組み合わせだな単体で皇位魔法を普通使わないだろ、痛いのに攻撃を受けるか、ゲームなのにあそこまで壮絶な戦いは演じられないな」

「じゃ行くか」

「いや調べよう何かあるかもしれない」

「わかった久しぶりに竜でも食うか」

「一つ聞くが何故禁断の魔法だけにしている？」

「坊主楽しいことはやり込まないとな熱中できることはいいぞ」

俺がヘルムの口元を外し、竜の死骸の中で食べられそうな場所に食らい付く、クリスは材料になりそうな部分を採集する、コギリは集まった材料から使えそうな物を纏めている。

第六章伝説の果て

現在俺の喰奴は四段階の神獣、修羅の女性版四段階天女。炎、氷、雷、風、地の四段階のコギリ、癒し三段階、聖なる魔法三段階。コギリの場合は雑魚を一掃する事と特別仕様の五個の選択ができる、ただその分成長は遅い。全員が中位に位置する、レベルは平均十五

俺が食らえるだけに食べるとレベルアップしたこれで十五だ。喰奴は食うだけでレベルアップする。現在の自動スキルと戦闘スキルから呪われた甲冑が変化する、表層の重防具が外れ、生体甲殻装甲甲冑が全身鎧から急所だけを守る鎧になる、代わりに無形の剣が変化し剣身の周囲に結晶が覆う、丁度身長分の長さになり鍔の所が全方位に張り出し剣というより兵器のような感じだ。それでいて重量感もない。重防具を身につけると急所を守っていた装甲が強制的に吸収し形状を変化させ女性剣士のような外見だ。

「軽防具に強制的になるか困ったな」

「収納されているだけだろう、モンスターが近づくと全身を覆うらしいと噂されているが、本当だろう」

博識なコギリが説明する、納得するしかない。食べ終わるとクリスタルに覆われたフラルベルジュを枕に眠った。

起きる頃、材料集めが終わり、高価な部分が材料となり安値の部分は集められ一応ゴミ捨て場に置かれる、熟練したプレイヤーは品定めから安い物を運ばず捨てる場所が生まれている。

竜の首から上の頭部は価値があるらしく肉が捨てられ骨が俺に渡さ

れる。防具と判断し被ると呪われたヘルムが吸収し小さくなり顔を覆う、どちらかといえば蛮族のような外見だ。

「マキリルが話したが、頭部の頭蓋骨は防具になり、プレスが吐ける様になるそうだ」

試しに深く呼吸し誰もいない空間に吹き出しと酸の霧が吐き出された。それは呼吸が許す限り吐ける。

「最大値の体力に関係するらしい使用しても減らない攻撃方法活用しると、当人は寝ている」

「そろそろ起こすわ」

クリスが竜の肉を焼いた焼き肉を食べ終え近くで寝ているマキリスを起こす。

「お起きたか、一応手がかり見つかった、竜の胃袋古文書があった、書かれている内容は我ら怒りて灼熱の吐息を吐く、全ての大地を焼き払い永久焦土の万雷なり要約すると兵器だ」

「そんな超兵器があるの？」

「わからないな、クリスが知っているわけでもない、クトゥーは？」

「灼熱は言い換えれば熱線砲じゃないか、収束する光熱波の放射だ」

「非現実的な科学技術だそれともヴィーナスの完成させたのか？」

コギリが話すと俺が首を振る。

「二十世紀に完成されている、ただ出力不足から実戦には投入されなかった、それをヴィーナスが改良し軌道衛生上で大陸弾道ミサ

イルの迎撃装置にしている出力さえ完成すれば無制限の熱線砲の砲撃が可能になる」

「有名ではないが軍事雑誌でも読めば載せられている情報だ」

「わかった、しかしどうする、今発見すれば最悪軍事バランスの崩壊があるぞ」

「発見し聖域の王国に隠すのは？」

「無理だ、そもそも兵器の大きさがある、大地を焼き尽くす程なら等身大とは思えない」

「しかし学説には必要なのだ、頼む」

「わかった戦士として守ろう、俺達の領地に運ぶ、ただ協力というわけにはいかないか、それを稼働させる技術開発と運用法の構築それが条件だ」

マキリスが安堵して事後承諾ではあるが二人も肯定する、戦になれば必要になる力だ。ただ問題はその後だ、戦が終われば次の戦に使うかどうか、問題は大きく国家政治に影響する。

下層を目指し進む、雑魚モンスターは俺のプレスで簡単に即死し、多少抵抗できる者は俺が叩き斬り、抵抗が完全にできる中レベルのモンスターには三人で殲滅する。大きな戦闘力の差があるためマキリスは非戦闘員扱いだ。下層は入り組んでおり地図を確認し八階を目指す。

最終階層は広大な空間に遺跡があった、遺跡の中にある遺跡は生活するための場所に一本の剣が突き刺さっている、壊れた兵器である大きな樽、マキリスは剣が刺さった樽が兵器だと主張し調べている、俺は剣を抜いた。ありふれた黒い剣、クリスタルに覆われたフランベルジュに混ぜると黒い闇が剣を覆う。そして二つに分かれた一つは強化された無形の剣の握り柄、剣身のクリスタルに覆われた漆黒の剣。まるで封印しているようだった。

「どういうことだマキリス、コギリ」

「無形の剣は一言で言うなら勇者の剣、つまり相反する剣は拒絶する、それが黒曜石の剣ではないか？」

「調べてみるが文献がないことには難しい、ひとまず無形の剣が拒絶する剣というしかない」

俺の収納された甲冑が急速に展開していく敵が接近している証だ。武器になる剣をどちらか選ばないといけないが面倒だと両方握る、相反するよう握ることはできても性能を発揮する形態にはならない。

「誰か接近するわね」

クリスが大鎌を構え背に俺とマキリスを守る。

「ああ接近する桁違いの魔力を感じる」

単独での中位の五重構成で核熱系の最強魔法が練成されていく、唱えられる詠唱から最強の魔法が具体化していく、パーティの周囲に核の灼熱が大気を高めていき。現れたのは五人だ。

一人は東洋的美人の知的な雰囲気のある女性で四人からは距離をとるように後ろにいる。残る四人には覚えがある竜殺しの純閻派の四人だ。ただ外見が変わっている。全員が戦士の様な感じから、一人はゲル状生物甲冑を身につけている深緑の短髪巻き毛の女性、一人は枯れ枝のような土気色の魔導士風の男性、一人は闇ルートの先鋭的な甲冑に身を包むが出される雰囲気は吐き気がするような劣悪さだ。統率する男性は鎧を身につけているが剣を持っていない代わりに浮

くオーブが四つある。

「さて何用かな」

「黒陽の剣を渡せ」

「残念無念無理難題」

コギリが横やりを入れて茶化す、俺が失笑し、思いっきり笑う。
四人は交渉をする気は更々無い様で武器を構え戦闘用魔法を構成し始める。一人の女性が前に進み同じようにクリスタルの覆われた剣を凝視する。

「大きすぎる力は世界を破壊します」

「故に護るのだ、一つお聞きしたいなぜそんな劣悪な連中と一緒に行動している」

「私個人が調べた結果ですが、その剣は狂気の剣で闇の聖剣です」

「なら渡すわけにはいかないな。護り通すのみ」

「対となる剣は見つかっておりません、私に預けてはくれませんか？」

「難しいな、光側とお見受けするが、言い換えれば戦の敵勢力に力を与えることになる、それを承知で渡せるほどの勢力も強い、調べ製造法を解明した後に考えよう」

「残念です」

「しかるに今の戦いに関与しないでもらいたい」

女性が頷き、一瞬で転移しマキリスを守るように防御魔法を使う、相当な魔導士だ。残った四人に向け最強の核熱魔法が放たれる、大爆発と桁違いの熱量に周囲の遺跡が融解する。白い煙が立ち残る。暫くして消えたことを確認すると四人の内筆頭らしい男性が抵抗魔法で防ぎきっていた。柄だけの無形は腰に下げ、黒陽の剣を握る、爆発的な衝撃波が放たれる、物理的な遠隔攻撃に四人のうち枯れ枝

のような男性が物理攻撃を低減する補助魔法を展開する。
が突き破り衝撃波で枯れ枝のような男性を飲み込み周囲に血飛沫が飛び散る。

「どうも最強の武器の一つらしい、勝てる気がするか？」

筆頭の男性が魔法を使う、特殊な魔法らしく展開される俺の体が硬直する。ひたすらの魔法合戦にクリスが接近する、甲冑の男性が剣で切り結ぶが速度の違いから三撃目のクリスの剛力で剣が破壊され返す鎌先で鎧の隙間になる下腹に突き立て引き裂く、男性が苦悶の声を上げ最後の魔法を放つ、自爆のような爆発でクリスが巻き込まれコギリの前に倒れる。

クリスが起きあがり回復魔法を使い癒す。これで同数だ。ゲル状の生物のような鎧を身につけた女性の武器はかぎ爪だ、両手にありクリスが迎え撃つが戦士としての技量は相手にあり攻撃回数の特化で何とか均衡を作っている。コギリが唱える抵抗魔法が発動され俺にかかっている魔法が多少軽減する、そしてコギリが一瞬の間もとらず風からの連携魔法攻撃でクリスが対峙する女性の深手を負わせる。その隙にクリスの鎌先が女性の腕を切り落とす。悲鳴が上げられ逃げ出す。

筆頭の男性が最大の魔法らしい切り札を放つ。一瞬でクリスが石化する。だが筆頭の男性も全力だったように逃げ出す。

石化を治療する魔法を女性が行使し憂うような目で俺を見た。

「羅刹の方、なるべく使わないでください対となる剣がない以上、何が起こるかは不明です」

「色々と聞きたいが名前は？」

「アバダール」

転移の魔法で消える、コギリとは違った大人の女性だった。戦闘の結果カルマポイントがマイナスになり完全に闇ルートに入るには善行をしすぎた、しかし、闇の聖剣を量産することに前向きな連中がいるのかは謎だ。

「一応兵器を運ぼう何事もそれからだ」

マキリスがそう話し大きな樽を運んだ。数があり七つの樽が運ばれ、護衛に雇われたプレイヤーが領地に運ぶマキリスも資料の整理が終わり次第向かうそうだ。マキリスの宿屋にある分析器に闇の聖剣を入れてみると解析不明とでた。クリスタルで覆われ持ち運びに不便なため柄を取り付け鈍器のように扱う。そんな中、闇ルートのプレイヤーが聖剣の奪還を目的に北部に進軍、俺達は急ぎ北部から西部へと移動した。

中立ルートのプレイヤーは聖剣を持たない側なのかは、知らないが精強の軍団がある。国境線では激しい戦場が起きているそうだ。歴史が動いた。光側は中立側の支援を行うために闇側領地に進軍、闇対中立・光同盟軍が激しい戦いを演じる。

領地に戻ると護衛の従騎士団が運ばれた兵器を調査していた。歴史は戦乱の時代になり少なくとも現在の聖剣争奪戦争に俺達は参戦することは無いと判断されていた。

だが皮肉にも兵器の価値は高まり帝国軍団の局地戦での敗北から押され気味になると古代兵器の活用法が真剣に研究された。活用法が確立されたのは帝国領土の三分の一が占領された敗戦濃厚な情勢の時代だった。

「つまり熱線砲か？」

「要約するとそうなりますただ動力源がない七つが放射器のよう

です」

護衛従騎士団、栄え盛る双璧と名乗っている、今の所有名ではない帝国予備戦力だ。

「動力源なら紅玉があろう」

国家から派遣された古代学者であり現在の皇帝の妹に当たる姫君、セリ・シアル・リバーズ、皇帝の一族である家名リバーズを持つ皇妹。

「残念ですが、紅玉は数少なく現在の戦線で、大規模な占領地奪還作戦に使用されています、残念なことに、研究段階古代兵器に使われるような動力源ではありません」

「なら聖剣か」

「敵の聖剣を使い、敵を討つか、皮肉だな」

コギリが呟く、帝国の弱体化でキンバリー高原、グレートサリデイー砂漠を占領され軍事力になるなら使われない兵器も道具もない、弱ったことは聖剣の得体の知れない感じが強い。

「皇女として命令する、聖剣を動力源として七流星を兵器化せよ」

護衛従騎士の団長が俺をみる、現在の情勢で金の価値は高まっている、必要とされる緊急の通過になるからだ、つまり金を払い、人を雇う。需要と供給でいえば俺達は儲かっているようで全く儲かっていない、次々必要になる技術情報料金に光側から提供される兵器市場での中立側の重要な鉱物が代価として支払われる。つまり出る方が多い。

俺が判断し団長が命令する、封印された聖剣が解かれマキリスの研究室に運ばれる。

正直ゲームであるから判断したが現実なら持ち逃げしただろう。団長の報告で必要な動力を確保することに成功したと報告された。必要になる古代兵器が集められ七流星の開発コードネームの兵器が搭載された浮遊戦略兵器が誕生した。

使われた戦場がグレートサンデー砂漠のため自然的破壊はなかった、ただ流星の悪夢と呼ばれる惨劇でもあった。一方的に熱線砲を撃たれ、組織的な軍事行動は不能になった。退却する闇陣営の軍勢を追撃し、砂漠を奪還し高原に迫ると闇陣営は中立陣営との和平を持ち、聖剣を使用しない代わりに西部に対する侵攻を取りやめる事柄が決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682x/>

今時金色のヴィーナスの方程式・空の軌道編

2011年10月21日01時02分発行